

京都女子大学 地域連携研究センター

Annual Report 2018



目次

■人口統計からみた東山区の現状と課題—急激な人口縮減地域—

特命副学長・地域連携研究センター長 竹安 栄子01

■女性地域リーダー養成プログラム

2018年度開講科目一覧05

■「学まち推進型」連携活動補助事業

平成30年度学まち推進型連携活動補助事業一覧(連携プロジェクト)13

京都刑務所「矯正展」における造形ワークショップ“ワクワク木育キャラバン”

発達教育学部児童学科 教授 矢野 真 14

「祇園祭小型鉾」修復プロジェクト

家政学部生活造形学科 准教授 前崎 信也 16

京都の伝統染織産業と人の輪をつなぐネットワークづくり

家政学部 生活造形学科 准教授 青木 美保子 18

音楽による地域貢献プロジェクト〈京女音楽ふれあい隊 京女の“音楽”宅急便〉

発達教育学部教育学科音楽教育学専攻 教授 田中 純 20

東山区における自主防災活動と町内会運営の実態に関する実証的研究

現代社会学部現代社会学科 准教授 奥井 亜紗子 22

「祇園新橋に生きる女性たち」聞き書きプロジェクト報告

現代社会学部 現代社会学科 准教授 森 久 聡 24

「伝えたい記憶 写真に見る京都・馬町空襲被害地図」成果報告

文学部史学科 教授 坂口 満宏 26

福祉施設の高い技術と、地域の特性を活かした商品共同開発および情報発信

生活デザイン研究所 非常勤研究員 宮原 佑貴子 28

第2回KWU小学生プログラミングコンテスト

現代社会学部現代社会学科 講師 丸野 由希 30

京女まち歩きオープンデータソン:2年目の取り組み

図書館司書課程 講師 桂 まに子 32

京都女子大学親子支援ひろば「びっばらんど」

発達教育学部児童学科 准教授 瀬々倉 玉奈 34

■会議・シンポジウム

第3回京女ラウンドテーブル会議36

学まち推進型補助事業 成果報告会37

女子大学連携ネットワーク38

2018年度 大学・地域連携サミット39

■生涯学習

履修証明プログラム40

平成30年度 生涯学習講座一覧40

「いつまでも、いくつになってもよい姿勢」3回シリーズ

京都女子大学地域連携研究センター客員研究員 原田 奈名子41

リカレント教育課程 ～働くための学びの場～44

■地域との連携活動

祇園新橋景観づくり協議会との連携46

弥栄自治連合会との連携46

祇園北地区4町内、地藏盆行燈絵の製作47

■企業・自治体との連携活動

酒造り体験48

京都市中央卸売市場との連携48

小学生対象の英語イベント49

■新たな包括的連携協定

大妻女子大学50

鹿児島国際大学50

東山警察署51

連携先一覧51

主な活動実績52

京都女子大学地域・産学官連携ポリシー53

人口統計からみた東山区の現状と課題 —急激な人口縮減地域—

特命副学長・地域連携研究センター長 竹安 栄子

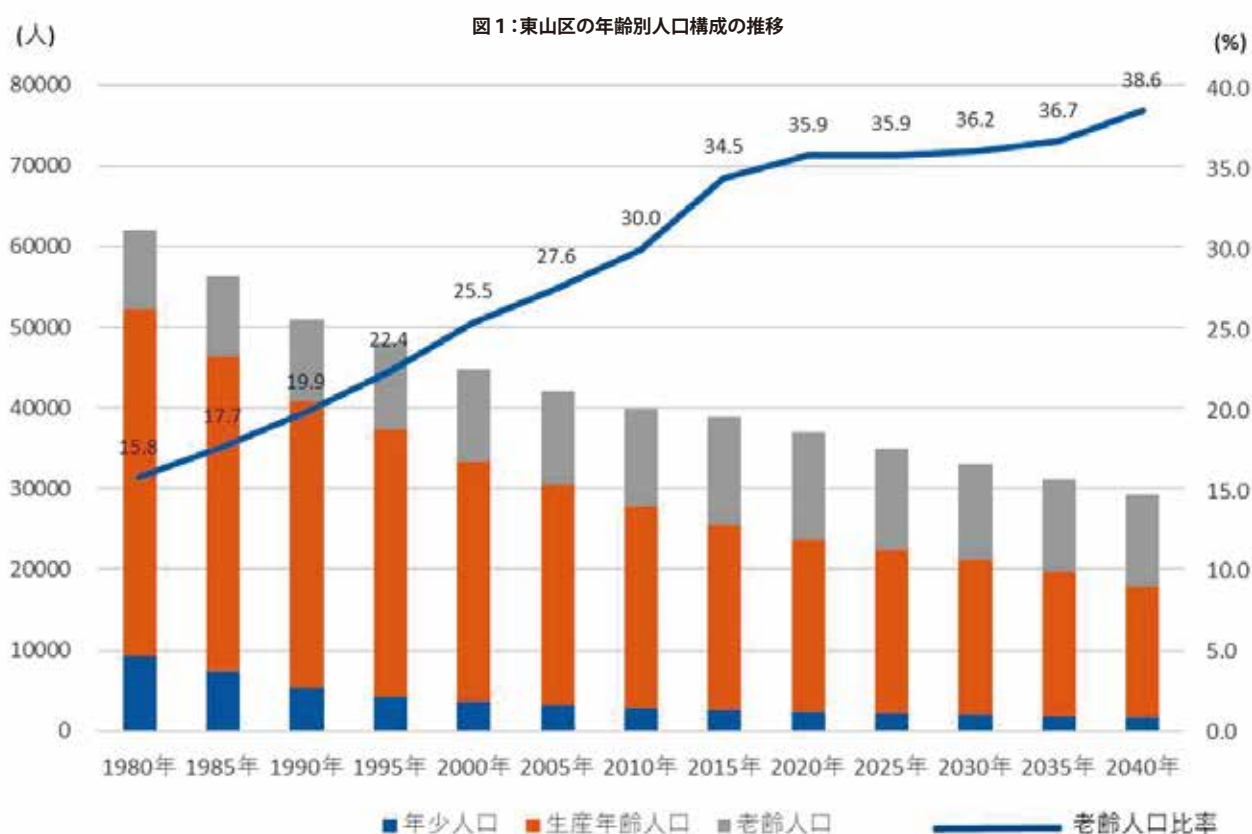
京都女子大学地域連携研究センターが開設されてから、2019年3月で3年半になる。この間、京都市「学まち連携大学促進事業」の採択を受け、教育課程として「女性地域リーダー養成プログラム」を設置するなど、設立当初の予想をはるかに超える活動を展開してきた。いずれの活動であってもその根底にある理念は、「地域課題の共同志向(大学が地域課題を地域と共有し、協働して解決に向かって努力する)」である。地域にとっても大学(特に大学教育)にとっても双方に資する活動を目指して、これまで様々な取り組みを推進してきた。活動の範囲としては主に京都市内、とりわけ本学が立地する東山区が中心になっている。地域社会¹⁾の視点からいえば、京都女子大学も重要な地域社会の構成員である。地域内には600人余りが居住する学寮もある。さらに1,000人以上の学生が東山区及びその周辺地域で生活している。その意味でも東山区の地域課題は、まさに本学の課題だといえる。

東山区は、京都市の中でもっとも小規模な行政区である。区内には、京都市内五花街の内4つの花街を擁し、清水寺に代表される有名観光スポットが複数存在する世界的な観光都市である。同時に清水焼などの伝統工芸に代表される製造業の街でもある。他に類をみない独特の地域特性を背

景とした地域課題と合わせて、多くの中心市街地が抱える人口減少・高齢化という問題にも直面している。この小論では、地域課題解決の方向性を考える助けになることを期待して、地域社会の構造基盤である人口構造上の課題「人口減少と高齢化」の現状を分析し²⁾、東山区の地域課題の理解に努めたい。

1. 人口の推移と将来人口 (図1参照)

周知のように、日本の人口は2015年以降減少局面に転じている。しかし図1に示したように、東山区では少なくとも1980年から人口は継続的に減少を続けている。しかもその現象の速度が極めて速いという特徴がある。1980年に62,077人いた人口が、2015年には39,799人(1980年比の減少率37.4%)、さらに2040年には29,189人(2015年比の減少率24.9%)にまで減少すると推計されている。特に1980年から2000年までの減少率が大きく、この20年間で約2万人減少して人口は約3分の2になった。全国の人口の推移と比較すると、1980年(117,060千人)から2040年(110,919千人推計値)の減少率は5.2%であるが、東山区のそれはなんと53.0%である。40年間で人口が半分以上にまで減少する。



このような急激な人口減少が推計される要因に、東山区内の出生率の低さがある。2015年の京都市の特殊合計出生率は1.3であるが、東山区はそれより低く1.01人であった。過去には0.67人(2004年)と全国の行政区で最低の出生率を記録した年もある。その結果が急激な少子化になって表れている³⁾。

年少人口(0～14歳)の推移をみると、1980年の9,316人が1995年には4,306人にまで激減している。わずか15年間で半減以下になっている。当然であるが、年少人口比率も1980年には15.0%であったが1995年には8.9%と10%を割り込んでいる。1995年の全国の年少人口比率は16.0%、少子化が叫ばれる今日でも12.3%(2017年)であるので、東山区の少子化がいかに早く、かつ深く進行しているかが理解される。正直、この間の東山区に何が起こったのか、との疑念を抱かずにはおられない。年少人口はさらに減少を続け、2015年には2,654人と20年間でさらに半減し、2040年には1,724人にまで減少すると推計されている。1980年と比較すると減少率は何と81.5%に上る。60年間で2割弱にまで減少するとの予想である。まさに都市型「消滅地域社会」といえよう。

年少人口の減少は当然その親世代の減少を伴っている。生産年齢人口(15～64歳)の推移をみると、1980年に42,940人であった労働人口は2015年には22,807人となった。減少率46.9%である。35年間でほぼ半減している。その後減少スピードが速くなって2040年には11,277人、25年間でさらに半減するとの推計である。

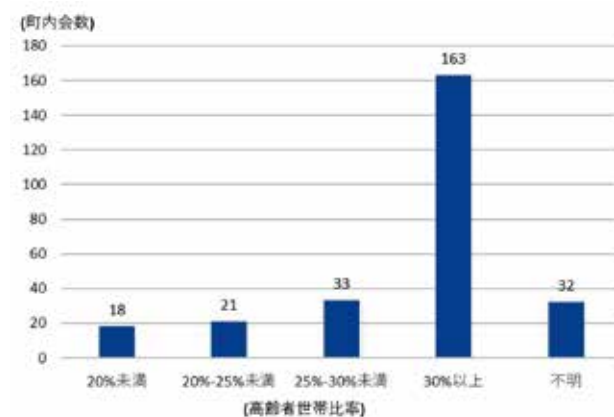
このような人口推移の中で増加を続けてきたのが高齢人口(65歳以上)である。1980年9,821人であった高齢人口は2015年には13,405人にまで増加している。これに伴い高齢化率(総人口に占める65歳人口の割合)も、1980年の15.8%から2015年にはその2倍以上の34.5%にまで上昇した。2015年の全国の高齢化率は26.6%であり、高齢化率が34%を超えるのは2038年と推計されているので、東山区は高齢化率においては全国より20年余り先んじているといえる。だが人口推計によると今後は高齢人口も減少段階に入り、2040年には29,189人と2,128人減少する。しかし高齢化率はその後も上昇を続け、2040年には38.6%と推計されている(全国では2065年で38.4%との推計)。

2. 高齢化率の地域差

このような東山区の人口構造を町内会単位で詳細にみるとさらなる課題が浮かび上がってくる。図2に人口構成が不明の32町内会を除く東山区235町内会の高齢化率別町

内会数を示した。当然であるが、高齢化率30%を超えている町内会が最も多く、163町内会、全体の69.4%である。しかし高齢化率20%未満の町内会が18、20～25%未満は21町内会ある。その一方で高齢化率40%を超える町内会も84町内会(35.7%)、内50%を超えている町内会が18(7.6%)含まれている。その内6町内会は高齢化率60%以上である。すなわち東山区全体では高齢化率は34.5%であるが、町内会別に詳細にみていくと、高齢化率9.7%(1町内会)から最高65.2%まできわめて偏差に富んでいる現状が明らかとなる。

図2：町内会別高齢者世帯比率



社会学者の大野晃⁴⁾は、高齢者が半数以上を占める集落では、住民自治の機能が急速に衰え、やがては消滅に向かうとして「限界集落」の概念を提唱した。農林水産省や国土交通省などはこの用語を用いていないが、やはり高齢化率50%以上の集落を、共同体の機能維持が限界に達している状態との認識で、実態調査を実施している⁵⁾。通常、いわゆる「限界集落」は過疎地域の課題として論じられているが、京都に限らず首都圏や大阪中心部などの都市部でも地域限定的に同様の現象が観察されている。

京都は歴史的に町衆の自治によって地域運営が担われてきた。現在も行政は、町内会を住民の自治組織と位置付け、市民と行政を結ぶ制度としては「市政協力員制度」を設けている。また行政の視点からは町内会の連合体である自治連合会が市民の末端機関と捉えられ、多くの活動が自治連合会を単位として実施されている。しかし今日、自治連合会の基礎単位である町内会の中に、自治活動組織としてはもはや危機に瀕している町内会が出現している現状を明確にとらえる必要がある。

例えば、2017年度と2018年度の地域連携研究センター「学まち連携大学」促進事業で、東山区の全自主防災部長を対象に実施した「自主防災アンケート調査」(現代社会学部准教授奥井亜紗子)⁶⁾によると、「町内会運営を継続していくのは困難だ」との回答は、「あてはまる」「ややあてはまる」を

合わせて55.4%、「高齢化で役員のなり手が不足している」は「あてはまる」と「ややあてはまる」で93.3%に達している。回答した自主防災部長の年齢も、54歳以下が25.8%と4分の1を占める一方、75歳以上も2割を超えている。このため自主防災部長として「住民を無事引率できるか」については66.4%が不安に思っている状況である。自主防災部は必ずしも町内会を単位として組織されているわけではないが、その74.0%が単一の町内会を単位としている。一方複数の町内会を単位とする自主防災部も約2割あり、奥井は町内会の高齢化を考えると複数町内による自主防災部への組織替えが必要な時期に達しているのではないかと提言している。特に高齢化率50%以上の町内会では単独の自主防災部の組織化は困難であると言わなければならない、さらに高齢化率が40%を超えている3割近くの町内会においても、町内会運営の見直しは喫緊の課題であろう。

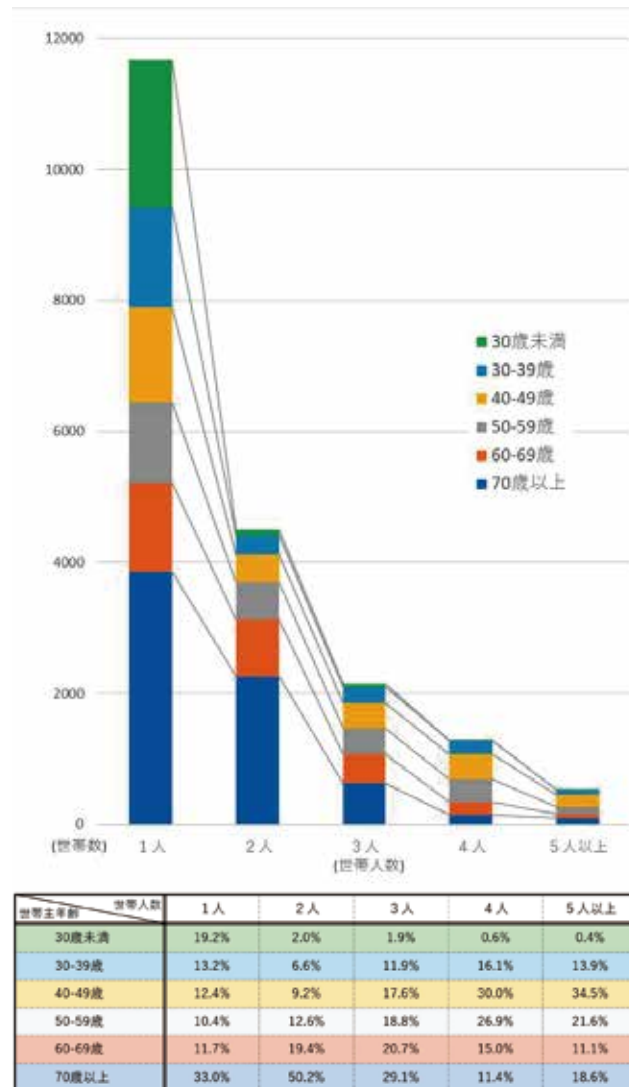
3. 世帯構成から見た課題

東山区の世帯数の推移をみると、人口は48,137人(1995年)から38,866人(2015年)と1万人近く減少しているにもかかわらず、世帯数はほとんど変化がない(1995年21,500世帯、2015年21,381世帯)。人口減少に比して世帯数の減少が緩やかであるというのは全国に広くみられる現象であるが、東山区は特に顕著である。若年者と高齢者の単身世帯が多いということがこれから推測される。

2015年国勢調査結果に基づく東山区の世代比率別世帯人員別世帯数を図3に示した。これをみると1人世帯が11,672世帯と全体の58.0%を占めている。その年代別内訳は、30歳未満が19.2%、30～69歳までの各年代が10～13%、そして70歳以上が33.0%を占めている。2人世帯は全体の22.3%で、年代別には70歳以上が50.2%、60～70歳未満が19.4%と2人世帯の約7割が60歳以上で占められている。3人世帯は10.6%、4人世帯6.4%、5人以上世帯3.6%と続く。この結果から、東山区の世帯の中でもっとも多いのが70歳以上の単身世帯であることがわかる。その数3,850世帯、総世帯に占める割合は19.1%に上る。さらに世帯主が70歳以上の2人世帯と合計すると、実に東山区の70歳以上世帯主の世帯の87.5%が単身ないしは2人世帯の高齢者世帯であると推定される。

東山区の2015年の高齢化率34.5%というのは、全国中山間地域の自治体と類似した高齢化率である。しかしこれら中山間地域のいわゆる農村地域の自治体と異なり、東山区の高齢者の暮らしの特徴は、単身及び高齢者のみの2人世帯の割合の高さである。高齢者の生活を考えると、その家族

図3：世帯人数別世帯主年齢



構成は重要な要因である。単身世帯、あるいは高齢者のみの世帯の場合、家族内に介護者がいないため公的サービスの必要性が高まると想定される。かつて実施した東山区町内会調査では、非同居ではあっても子ども家族が京都市内に居住し、高齢の親世代の日常生活をサポートしているケースが多くみられるという状況が確認されている。しかし高齢化率は同じであっても、同居比率が高い農村地域とは高齢者の生活状況は大きく異なるという事実を認識しておくことは重要であろう。

次に30歳未満の居住形態をみると、世帯主の年齢が30歳未満の世帯数2,385のうち実に2,245世帯94.1%が単身世帯である。すなわちこれは東山区に居住する30歳未満の2,245人が未婚であるということを意味している。先に東山区では人口減少にもかかわらず世帯数が減少していないことを指摘したが、その背景に学生用マンションのような単身者用の住居の増加があることがここから推測される。単身者マン

ションの居住者は、通常、町内会にも加入せず、地域と関係を持つことなく生活している。東山区の20歳代人口は5,010人(2015年)であるが、少なくともこのうち約半数の2,245人が単身者であり、したがって町内会に所属していない住民であると推定される。町内会員の高齢化が進行する一方で、貴重な若年層の住民は地域の自治活動との接点を有していないという実態は、東山区が抱える課題を一層困難にしているといえよう。

4. 地域課題の解決に果たす大学の役割

以上、人口統計の分析を通して、東山区の現状とそこから見てくる課題を考察してきた。地域課題の解決のための方策と、その実施にあたって京都女子大学が果たすことが出来る役割として次の5点を提案して本小論のしめくりとしたい。

①東山区の人口はもはや自然増では増加に転ずることは不可能である。考えられる解決策は地域外からの流入人口を増やすことしかない。ただ、近年、世界的観光地として注目を集める東山区の地価は高い水準で推移し、子育て世代が住まいを確保するのはきわめて困難である。しかも歴史的景観地区として多くの地域が土地利用制限地域に属するため高層住宅が建設できない。その一方で東山区は空き家率もきわめて高い。空き家問題は東山区の重要な地域課題となっている。そこでこのような空き家を行政の補助金で改装し、子育て世代のために提供してはどうであろうか。そのためには一定の家賃補助が必要となる。老朽化した住宅を、若い子育て世代に魅力的にリノベーションすることには京都女子大学も協力可能である。

②子育て世代に東山区内で居住してもらうには、子育て環境の整備が欠かせない。色々と制約はあるが、就学前の子どもを持つ親への支援や小学生の放課後の生活支援など、京都女子大学が行政などと協力しながら貢献できる余地は十分にあると思われる。東山区内における子育て支援への取り組みは、これからの大学課題として検討する必要がある。

③比率は低いが、東山区内にも一定割合の若年層が居住している。しかしその多くが単身者向け住宅に居住し、地域活動と無縁であることが町内会活動の弱体化を推し進める要因となっている。それら若年層の住民には、学寮やマンションで生活する本学の学生も含まれている。2019年度から副専攻科目として開設される地域連携科目の履修などを通じて、ごみ処理や街灯の設置など地域の安全や生活を住民自治組織である町内会が支えている事実を学生が認識

し、地域社会の一員としての自覚を養うことによって、町内会活動への主体的な協力を促すことは、大学が果たすべき重要な教育課題である。

④先に指摘したように、高齢化の進行によって住民の自治組織としての活動を維持することが困難になっている町内会が出現している。自然災害が頻繁に発生する今日、自主防災制度の実質化のためにも町内会の統合は喫緊の課題といえよう。しかし統合にあたっては住民の合意形成が極めて重要である。合意形成のための住民の意向調査に、京都女子大学の調査研究機能を活用することは有効であると思われる。まずは行政に対して情報を提供することから進めていきたい。

⑤社会学者の徳野貞雄は、近隣に他出している子どもを集落運営に呼び戻すことによって、過疎化の進行する集落を活性化することを提案している⁷⁾。この考え方は、東山区にも活用可能であると思われる。またすでに実施されているが、地域内で営業する事業者や従業員、さらには企業や寺院も含めた地域運営を組織的に展開することが、人口減少という現実をから逃れることが出来ない東山区の持続的展開に不可欠であろう。京都女子大学の地域連携研究センターは、これら多様なステークホルダーによる地域づくりの結節点としての役割を果たすことを目指している。

以上の提言を直ちに実行に移すのは容易ではないが、本論で指摘した課題を指針として、日々の連携活動を行ってきたい。

[注]

- 1) ここでの「地域社会」とは、市民、行政はもとより産業界など地域社会を構成する多様な構成員の総体を表す語として用いている。
- 2) 東山区のデータは京都市統計ポータル <https://www2.city.kyoto.lg.jp/sogo/toukei/Area/index.html>、全国のデータは国立社会保障・人口問題研究所「日本の将来推計人口(全国)」 www.ipss.go.jp/pp-zenkoku/j/zenkoku2017/pp_zenkoku2017.asp による。
- 3) 京都市総合企画局情報化推進室「統計解析」 http://www2.city.kyoto.lg.jp/sogo/toukei/Publish/Analysis/News/079Vital_death.pdf
- 4) 大野晃『山村環境社会学序説』農山漁村文化協会、2005年。
- 5) (財)農村開発企画委員会「限界集落における集落昨日の実態等に関する調査」2005年
- 6) 奥井亜紗子「自主防災アンケート」単純集計結果 rccp.kyoto-wu.ac.jp/?p=2097
- 7) 徳野貞雄・柏尾珠紀『T型集落点検とライフヒストリーでみえる家族・集落・女性の底力：限界集落論を超えて』農文協、2014年

女性地域
リーダー養成
プログラム女性地域リーダー養成プログラム
2018年度開講科目一覧

科目名	担当者	開講期間	概要
連携活動入門	竹安 栄子	後期 / 火 2	連携活動事始め～連携活動にチャレンジ～ 連携活動に従事するにあたって、知っておくべき基礎的な事項や身につけておくべき倫理事項、さらに多様な連携活動の実態について講義する。
地域連携講座 B1	各地方自治体 (中道 仁美)	前期 / 火 3	地方自治体の取り組みを学ぶ 大学が就職協定している行政の担当者から各県の現状と施策を学び、地域社会の担い手として女性が果たす重要性を理解する。 11県の地方自治体担当者が授業を担当。
地域連携講座B2	京都市・京都市の企業及び団体 (竹安 栄子)	前期 / 月 2	京都の社会と連携活動 行政や企業、各種組織の実務担当者をゲストスピーカーとして招き、それぞれの分野からみた京都の社会や産業の実態を講じてもらうオムニバス形式の授業。京都市の姿と京都市が直面する課題を多角的視点から理解し、かつ課題解決に向けて学生自身が地域貢献活動に主体的に取り組むよう学生の行動を促進することを目的としている。
産学連携講座A1	株式会社三井住友銀行 (寄附講義)	後期 / 水 2	持続可能な社会の実現を果たす民間金融機関の役割 三井住友銀行とそのグループ会社での事業内容を素材にその仕組みを解説しつつ今後の社会生活や資産形成に必要な知識を習得する。
産学連携講座A2	野村證券株式会社 (寄附講義)	後期 / 木 4	基礎知識としくみの理解 激変する日本の資本市場の全容と投資のリスク&リターンの方、株式投資・債券投資・ポートフォリオ運用・外国為替相場など証券投資における重要テーマを解説する。
産学連携講座A3	阪急電鉄株式会社 (寄附講義)	後期 / 金 4	民営鉄道事業と地域社会 阪急電鉄グループの事業内容を素材に、地域や市民生活にどのように関わり、その発展に寄与してきたかを解説する。
産学連携講座B1	株式会社朝日新聞社 (寄附講義)	前期 / 火 5	新聞を通じて現代社会の諸問題について理解を深め、社会に対する問題意識を養う 現役の新聞記者が様々な社会問題をテーマに複数回講義する。また、当日の新聞を使って社会の問題を考える。学生は各々の意見を小論文として提出し、講師が添削する。
産学連携講座B2	大阪ガス株式会社 (寄附講義)	前期 / 木 3	エネルギーを通してみる社会変化と環境対策 ガス・電気の基礎知識、国のエネルギー施策、時代背景等について解説しながら、身近なエネルギーから環境問題、社会情勢について考える機会とする。
産学連携講座B3	連合京都・京都中小企業家同友会・京都信用金庫 (寄附講義)	前期 / 水 2	女性が働くということ・働く者の権利を学ぶ 労働組合や企業、各種組織の実務担当者をゲストスピーカーとして招き、それぞれの分野からみた働くことに必要な基礎知識について学ぶ、オムニバス形式の授業。
連携課題研究	桂 まに子	通年集中講義	連携課題を発見し、情報技術を用いた問題解決策を考える デジタル時代に地域や企業が抱える連携課題について考え、研究テーマを決めて、情報技術 (Wikipedia、OpenStreetMapなど) を活用した問題解決を図る。
連携課題研究	京都信用金庫 (寄附講義)	通年集中講義	女性起業家と考える、「創業しやすい京都」 京都で活躍する女性起業家との対話や、事業の見学・体験といった場を通して「京都で創業するうえでの課題」を発見し、「創業しやすい京都」とはどのようなものかを考察する。
連携課題研究	宮原 佑貴子	通年集中講義	(2019年度新たに開講) 京都の伝統染織産業の技術を体験し、現代に活かす 京都の伝統的地場産業である着物染織の高い技術を自ら体験し、知識を深め、それらの魅力を広く伝える手法を考え実践する。

連携活動入門

《竹安 栄子》

連携活動事始め～連携活動にチャレンジ～

授業の到達目標

1. 連携活動の社会的意義について理解する。
2. 連携活動の基礎知識を身につける。
3. 連携活動への従事が自分の成長を促すものであることを体験する。

授業の計画

- 第1回 オリエンテーション
- 第2回 連携活動とは？—なぜ今、求められているのか。
- 第3回 地域社会の仕組み 1—多様な概念
- 第4回 地域社会の仕組み 2—地域社会の構造
- 第5回 人口減少社会と地域社会の課題
- 第6回 地域社会としての京都 1—現状と課題
- 第7回 地域社会としての京都 2—京都の町内会
- 第8回 京都女子大学の連携活動
- 第9回 多様な分野の連携活動
- 第10回 企業に求められる社会的責任
- 第11回 連携活動に必要な倫理的配慮
- 第12回 連携活動の実践 1
- 第13回 連携活動の実践 2
- 第14回 実践体験報告
- 第15回 全体のまとめ

▶▶▶▶▶ 受講者の声 (コメントペーパーより抜粋)

- ・京都女子大学が地域と関わりをもち、多くの活動をしていることを、この科目を受けるまで知らなかった。もともと学内で活動の認知度を高め、学生も参加していけると良いと思った。
- ・「社会で活躍できる女性が少ない。」この現状は知っていたが、具体的に知ることができた。自身も社会の一員として、地域活動に参加していきたいという気持ちを持った。
- ・京都に住む大学生として、地域と関わり活動できることがあることを知った。
- ・実際に地域に出て活動すると、若い力があると活気づくと喜んでいただき、今後も自身が活動に参加していきたいと思った。
- ・授業の中で、人口減少を少子高齢化といわれる実態を実感した。子育てする環境を社会全体で作っていく必要があると強く思った。自分自身も社会の一員としてできることをやっていきたい。
- ・連携活動をする場合は、連携先の企業、地域をリスペクトする気持ちを持ち、活動をしていきたいと思う。

地域連携講座B1

《各地方自治体(中道 仁美)》

地方自治体の取り組みを学ぶ

授業の到達目的

21世紀になって人口減少局面に突入した日本において、多くの自治体が人口構造の急激な変化に対応すべき努力を続けている。本講義は就職協定を締結している11の自治体の行政担当者がリレー講義をおこなうことにより、以下の能力を養成することを目的としています。

1. 現代社会の現状と課題を研究する。
2. 地域に関する現状と施策を理解する。
3. 地方自治体の行政を学ぶ。
4. 論理的な思考を磨き、意見・考えを文章にする。
5. 自ら活動する方法を学ぶ。

授業の計画

1. イントロダクション：オリエンテーション：授業の進め方
2. 広島県：仕事も暮らしも。欲張りなライフスタイルの実現
3. 石川県：石川で働く京女OGが本音で語る 石川県の幸せのカタチ
4. 岡山県：「晴れの国おかやま」の就職支援施策
5. 鳥取県：鳥取発の地方創生～子育て王国とつとりの挑戦
6. 滋賀県：滋賀から世界へ、世界から滋賀へ ～琵琶湖の経験を活かした水環境ビジネスで世界に貢献
7. 滋賀県：ほどほど田舎、ほどほど都会の滋賀暮らし ～滋賀で暮らす 滋賀で働く～
8. 静岡県：静岡県の持つポテンシャルを活用し「ふじのくに」を活性化しよう！
9. 静岡県：住んでよし、働いてよしの静岡県
10. 山口県：「山口県の魅力について」
11. 香川県：早わかり「うどん県」～全国一小さな県の大きな魅力～
12. 徳島県：「地方創生」の“成果”結集・好循環に向けて
13. 福岡県：県民幸福度日本一を目指して～福岡県の雇用情勢とUターン就職支援について～
14. 福井県：ふくい魅力を発見！「ふくい講座」
15. 総括：地方の課題と女性：レポート作成

地域連携講座B2

《京都市・京都市の企業及び団体(竹安 栄子)》

京都の社会と連携活動

授業の到達目標

1. 地域社会としての京都の実態を理解する。
2. 京都を事例として、現代の日本の地域社会が抱える課題を理解する。
3. 地域社会の多角的側面を理解する。
4. 行政をはじめとした各種分野の実態を理解する。
5. 地域社会が市民の力で成り立っていることを理解する。
6. 学生が地域社会の構成員として行動することが社会から期待されていることを理解する。

授業計画

- 第1回 4月9日 イントロダクション(竹安)：
本講義の概要や目的など受講に当たって理解しておくべき事項について解説する。
- 第2回 4月16日 京都市の姿と課題(京都市役所)：
京都市の概要と大学生の連携活動の実態について解説する。
- 第3回 4月23日 東山区の姿と課題(東山区役所)：
東山区の特徴や概要と京都女子大学の学生が携わっている地域連携活動について説明する。
- 第4回 4月30日 京都の景観まちづくり(NPO京都景観フォーラム)：
京都の魅力的な町並みや風景を、受け継ぎ守り育てる地域の人達と、それを支える行政やNPOなどの、最前線の取り組みについて学びます。
- 第5回 5月7日 共生社会を目指して(東山総合支援学校)：
京都における特別支援教育の歩みを辿るとともに、現代社会において「障害」とは何なのかを考える。また、総合支援学校の教育活動について、児童生徒や保護者の視点に立つ試みを通して理解を深め、共生社会の形成を目指す主体者としての素養を養う。
- 第6回 5月14日 「負の回転ドア」を考える(京都刑務所)：
京都刑務所における受刑者の実情と社会に貢献する刑務官の姿
- 第7回 5月21日 (京都保護監察所)：更生を支える制度
- 第8回 5月28日 マスメディアから見た京都(朝日新聞社)：
日々報道を続ける記者の視点で、京都を巡る現状や課題などを、取材現場の話しを交えながらお伝えします。

第9回 6月4日 京の台所をささえる(京都市中央卸売市場)：
市民の台所を支える中央卸売市場の仕組みと役割

第10回 6月11日 京都の酒(招徳酒造)：
伏見の酒造りの伝統と、酒造産業が抱える課題を解説する。

第11回 6月18日 京都の観光(ハイアットリージェンシー 京都)：
ホテル業界の視点から京都の観光について話をするとともに、地域の一企業として東山区の観光振興に果たす役割についても解説する。

第12回 6月25日 京都の経済と金融 1(京都銀行)：
地方銀行の役割や、京都銀行の概要および女性の活躍推進に関する仕組みについて説明し、今後の自身のキャリアについて考察する機会とする。

第13回 7月2日 京都の経済と金融 2(京都銀行)：
京都銀行の地方創生や地域活性化への取り組みについて、具体的事例や最新の動向を解説する。

第14回 7月9日 京都の企業(本学就職部長・京都ジョブパーク)：
大学生の就職指導にあたる立場から、京都の多様な企業の実態について解説する。

第15回 7月16日 総括(竹安)：全体のまとめ

受講者の声(コメントペーパーより抜粋)

- ・授業で最初東山を歩くだけでも、京都という街を知らなかったことに気づいた。高齢化が進んだり、商店街が活気をなくしているのに驚いた。「学生のまち」と言われる京都なので、地域と大学が連携した東山カフェのようなアイデアを出し、活動が増えると良いと思った。
- ・地域活動が、担い手不足、参加者不足、後継者不足、連携不足となっている現状を講義の中で理解した。地域連携のきっかけとして、大学の活動があることを知った。連携する上では課題もあるだろうが、まずは、参加し、自分ができるところを行うことが、非常に大事であると思った。
- ・大学に入り、京都で一人暮らしを始め、自分も観光客気分だった気がするが、今は、自分自身も住民という視点で、観光地京都を見られるようになった。住民として学生としてできる活動には参加したい。
- ・講義を聞いて、京都についてだけでなく、自分の住んでいる地域のまちづくりについても考え直すきっかけとなった。自分が大人になり家庭を持つようになったら、大きく関わる課題なので、今からどう活動しているのかを知ることが大切だと思った。
- ・京都の伝統的な街並みや建物は自然に維持されているものではなく、地域の人々やNPO法人など多くの方々の努力で維持されていることを知った。美しい京都を残していくためにも、学生の間に様々な活動に参加し、地域活動に対する学びを深めたいと思った。
- ・今まであまり関心がなかった地域活動やボランティア活動に参加し、社会にでる前に学びたいと思った。

産学連携講座A1

《株式会社三井住友銀行(寄附講義)》

持続可能な社会の実現を果たす民間金融機関の役割

授業の到達目標

- ・金融グループの役割と国内外の社会環境についての理解
- ・受講者自身の今後の資産形成に必要となる知識の習得

授業の計画

1. オリエンテーション
2. 金融業界について
3. 三井住友銀行の業務①銀行の3大業務／当行各部の業務内容紹介①
4. 三井住友銀行の業務②当行各部の業務内容紹介②／京都女子大OG講話
5. 身近なお金の話 人生の3大資金／ライフプランについて
6. 証券会社って？ 証券会社の業務内容と金融商品の基礎
7. 身近なお金の話 万が一が起こった際のお金／遺言信託とは？
8. 信託って？ 信託銀行の業務内容紹介／超富裕層と信託
9. これまでのまとめ 重要ポイント解説
10. 運用とは？ 資産形成を考えるための「はじめ」の知識
11. リースって何？ 身近なリース商品とその役割
12. 色々なカードについて クレジットカードの利便性と注意点
13. ローンについて ローンとの上手な付き合い方
14. 三井住友銀行の最新の取組 ITを活用した取組
15. 総論 まとめ

》》》》 受講者の声 (コメントペーパーより抜粋)

- ・金融業界は、硬いイメージがあったが、福利厚生が充実しており、女性が活躍しやすい業界であることが、よくわかった。
- ・社会に出てから必要な金融の知識が身につけて良かった。
- ・自分の専門分野では学べない知識が得られて有意義だった。
- ・金融への就職活動について役立つ知識や情報を得ることができた。
- ・OGが活躍している姿を知ることができ、これからの活動への励みになった。

産学連携講座A2

《野村證券株式会社(寄附講義)》

基礎知識としくみの理解

授業の到達目標

証券・金融市場関連のテーマを中心とする講義を通じて、社会・経済の動向に関する見聞を広め、今後の社会生活や資産形成の際に必要な知識を習得する。

授業の計画

- 第1回: ガイダンス
 - 第2回: ライフプランニングとNISA
 - 第3回: 経済情報の捉え方
 - 第4回: 金融資本市場の役割とその変化
 - 第5回: グローバル化する世界と資本市場の果たす役割
 - 第6回: 証券投資のリスク・リターン
 - 第7回: ポートフォリオ・マネジメント
 - 第8回: 株式市場の役割と投資の考え方
 - 第9回: 債券市場の役割と投資の考え方
 - 第10回: 外国為替相場とその変動要因について
 - 第11回: 投資信託の役割とその仕組み
 - 第12回: 資本市場における投資家心理
 - 第13回: 日本の株式市場史
 - 第14回: 産業発展と投資の考え方
 - 第15回: まとめ
- 定期試験

》》》》 受講者の声 (コメントペーパーより抜粋)

- ・始めは難しそうな授業だと思ったが、わかりやすい解説で理解しやすかった。
- ・専門外の金融・証券に関する知識を得ることができて良かった。
- ・今まで知らなかった金融界のことを知り、就職活動への意欲が高まった。
- ・証券会社への興味や関心が増し、就職を具体的に考えるようになった。
- ・OGの方から具体的な業務の話や女性が働くことについて有意義な情報が得られてよかった。

産学連携講座A3

《阪急電鉄株式会社(寄附講義)》

民営鉄道事業と地域社会

授業の到達目標

阪急電鉄及び阪急沿線を題材に、鉄道以外の幅広い事業を営む民営鉄道事業の特徴を知るとともに、鉄道会社が沿線地域の発展や沿線の方々の生活向上に果たしてきた役割を踏まえて、地域社会の成り立ちや発展について学ぶ。

- 1) 京阪神地域の社会や文化についての理解
- 2) いわゆる「私鉄」が沿線地域に果たしてきた役割についての理解
- 3) 受講者自身の今後のキャリアについての考察

授業の計画

- 1 阪急沿線について(現在の阪急沿線の紹介)
- 2 鉄道業界における民営鉄道の特徴と小林一三(沿線の開発と様々な事業への取り組み)
- 3 マルーンカラーと阪急らしさ(阪急電車の特徴、神戸線沿線の発展)
- 4 梅田の発展(梅田「阪急村」、ターミナルデパート、エリアマネジメント)
- 5 街の発展と駅・鉄道(駅の工夫、街における駅の役割、立体交差化事業)
- 6 駅の利便性(駅ナカ・駅ソト小売事業、広告事業)
- 7 西宮北口の発展(「関西で住みたい街No.1」のなりたち、阪急西宮ガーデンズ)
- 8 小林一三とレジャー事業(宝塚歌劇、遊園地、プロ野球)
- 9 宝塚歌劇の発展と地域との共生(宝塚大劇場、ベルばら、手塚治虫)
- 10 阪急沿線における住宅事業(分譲住宅地の開発から都心型マンションまで)
- 11 街におけるホテルの役割(地域のランドマーク的役割から宿泊特化型ホテルまで)
- 12 事業組織の運営・管理(本社部門の業務)
- 13 子育てしやすい社会・街づくり(学童保育事業への取り組み、女性の働き方)
- 14 社会貢献活動(社会貢献プログラム「ゆめまちプロジェクト」)
- 15 これからの阪急@京都(事業の企画、仕事への活かし方)

産学連携講座B1

《株式会社朝日新聞社(寄附講義)》

新聞を通じて現代社会の諸問題について理解を深め、社会に対する問題意識を養う

授業の到達目標

- 1) 新聞を通し情報リテラシーを高める
- 2) 社会の問題について「自分の意見を持つ」姿勢を身につける
- 3) 社会で求められる「書く力」「伝える力」を養う。

授業の計画

- 第1回:メディアの特徴、新聞の役割、記者活動とは
- 第2回:新聞の読み方、各紙比較
- 第3回:文章の書き方①(作文作成)
- 第4回:文章の書き方②(作文講評)
- 第5回:記者講義①貧困問題
- 第5回:小論文作成(800字、60分)
- 第6回:小論文の講評、議論
- 第7回:記者講義②難民問題
- 第8回:小論文作成(800字、60分)
- 第9回:小論文の講評、議論
- 第10回:記者講義③労働問題
- 第11回:小論文作成(800字、60分)
- 第12回:小論文の講評、議論
- 第13回:読者投稿欄「声」編集長講演
- 第14回:政治と選挙、世論調査
- 第15回:講義まとめ

》》》》》 受講者の声(コメントペーパーより抜粋)

- ・文章の書き方など、苦手分野と感じていたのが、好きになることができて役立った。
- ・自分の考えを持つこと、文章を書くことが楽しいと思えるようになった。
- ・文章を書くということについて、とても勉強になりこの講座を受講して良かった。
- ・非常に刺激的な講座だった。とても役立つ内容で、受講して良かったと思う。

産学連携講座B2

《大阪ガス株式会社(寄附講義)》

エネルギーを通してみる社会変化と環境対策

授業の到達目標

電気・ガスを中心にエネルギーを通じて、日本・世界の抱える環境問題や社会情勢に関する見聞を広め、今後の社会生活に必要な知識を習得する。

授業の計画

- 第1回：関西のガス事業の歴史
- 第2回：都市・地域・住まいとエネルギー
- 第3回：天然ガスの調達について
- 第4回：世界における天然ガス利用等の概況(小テスト)
- 第5回：都市ガスの製造と供給の概要
- 第6回：ガス事業者による保安の取り組み
- 第7回：大阪ガスのDNAと家庭用機器開発
- 第8回：ガス事業者のPR戦略(小テスト)
- 第9回：日本のエネルギー政策について
- 第10回：ガス事業者の電力事業の概要について
- 第11回：温暖化対策に向けた世界の動向と日本の政策
- 第12回：ガス事業者の温暖化対策の取り組み
- 第13回：住まいとエネルギー
- 第14回：コミュニティと文化
- 第15回：エネルギー会社と地域共創(小テスト)

産学連携講座B3

《連合京都・京都中小企業家同友会・京都信用金庫(寄附講義)》

女性が働くということ・働く者の権利を学ぶ

授業の到達目標

1. 働く上で知っておくべき基礎知識を習得する。
2. 働く楽しさや労働環境の実態を学ぶ。
3. 将来働くことに備えて、職業や企業を選択できる力を養う。

授業の計画

- 第1回 イン트로ダクション
 - 担当教員と連合京都橋元会長
 - 連合京都の橋元会長を招き、本講義の概要や目的など受講に当たって理解しておくべき事項について、担当教員とともに解説する。

第2回 労働組合の歴史と連合の取り組み

連合本部から講師を招き、働く人の権利を守る活動について学ぶ。

第3回 労働者の権利を知る

連合京都から講師を招き、労働者の権利について基礎的な用語や労働法について学ぶ。

第4回 雇用形態別の働き方

連合京都から講師を招き、正規と非正規の処遇の違いを理解する。

第5回 働き方改革

連合本部から講師を招き、法改正の動向や連合の果たす役割について学ぶ。

第6回 男女平等、WLB、ハラスメント対策

連合京都から講師を招き、イキイキと働くための基礎知識を学ぶ。

第7回 金融・小売業の職場の課題

金融・小売業の現場から講師を招き、産業の特色や職場の状況について理解をする。

第8回 教育・保育、公務職場の課題

教育・保育や公務員の現場から講師をまねき、各職場の特色について理解する。

第9回 京都の労働者の状況

連合京都から講師を招き、京都の労働者や労働相談の窓口の実情を知る。

第10回 金融業

京都信用金庫から講師を招き、地方金融業の役割について理解する。

第11回 金融で働く

京都信用金庫から講師を招き、地方金融業で働くことについて理解する。

第12回 地域の中小企業

東山中小企業家同友会から講師を招き、地域に密着して経営を継続する中小企業の実情について理解する。

第13回 女性経営者の東山中小企業家同友会から講師を招き、女性経営者の働き方について学ぶ。

第14回 ヤングハローワーク

連合京都から講師を招き、オール京都の体制で取り組まれている若者の就労支援の実情について理解する。

第15回 全体のまとめ

担当教員による総括

連携課題研究

《桂 まに子》

連携課題を発見し、情報技術を用いた問題解決策を考える

授業の到達目標

- ・研究テーマに関する情報収集
(文献、ウェブ、現地、関係者など)
- ・情報技術を用いた編集・発信
(Wikipedia、OpenStreetMapなど)
- ・自ら発信した経験をもとに、連携活動を進展させるための提案を行う

授業の計画

1. オリエンテーション: Problem Based Learningについて
(4月11日5講時)
2. 地域や企業との連携課題について整理する(ディスカッション)
3. プロジェクト準備(連携課題テーマの設定、情報収集)
4. Wikipediaを用いた地域情報の編集・発信について
5. Open Street Mapを用いた地域情報の編集・発信について
6. プロジェクト設計(ミニプレゼンテーション、ディスカッション)
7. プロジェクト実行
8. プロジェクト実行
9. プロジェクト実行
10. 中間報告(ミニプレゼンテーション、ディスカッション)
11. プロジェクト実行
12. プロジェクト実行
13. プロジェクト実行
14. 研究レポートの作成
15. 発表

○講師コメント

受講生2名の研究関心は「植物を扱った市民活動の意義」「子どもが少ない地域の図書館における児童サービス」であった。自ら地域に入り、実践に携わる当事者らに直接疑問を投げかけて課題解決のための糸口を見つけ出そうとした行動力を高く評価したい。学期末には、研究レポート「東山瓢箪プロジェクトのこれまでの経過と今後の展望」「図書館が地域に出る児童向けアウトリーチサービス: お寺での読み聞かせ実践報告」をまとめた。ご協力いただいた東山瓢箪プロジェクトおよび京都市東山図書館の関係者の皆さまに感謝申し上げます。

連携課題研究

《京都信用金庫(寄附講義)》

女性起業家と考える、「創業しやすい京都」

授業の到達目標

- ・京都における「地域経済」についての見識を深める。
- ・「創業」をテーマとしたエコシステムについて「気付く力」「考える力」を養う。
- ・人生の選択肢として、「就職」と「創業」についての理解を深める

授業の計画

- 第1回: (4月11日5講時)
オリエンテーション ～本講義の流れについて～
- 第2回: (4月18日5講時)
京都信用金庫における創業の取組
- 第3回: 集中講義①(8月6日1～4講時)
「京都における企業の実例」
- 第4回: //
- 第5回: //
- 第6回: //
- 第7回: 集中講義②(9月4日1～4講時)
「事業所訪問による発見課題とソリューションの中間発表」
- 第8回: //
- 第9回: //
- 第10回: //
- 第11回: 集中講義③(9月14日1～4講時)
「起業家への提案発表」
- 第12回: //
- 第13回: //
- 第14回: //
- 第15回: (10月17日5講時)
最終報告:「創業しやすい京都」

連携課題研究《京都信用金庫(寄附講義)》



▶▶▶▶ 受講者の声 (コメントペーパーより抜粋)

- 学部の授業では学ばなかったような内容で、社会や企業についてなど、これから社会に出るために必要な具体的な内容を学ぶことができた。
- 今までぼんやりとしか考えていなかった自分の進路、ライフプランについて考えるきっかけとなる授業だった。自分のこれからの人生が変わったと言っても過言でないほど、貴重な体験ができた。
- 少人数の演習形式で、意見交換して進めるため、自分の考えをまとめたり、発表するトレーニングになったと思う。この貴重な経験は、就活にも役立ちそうだ。
- パワーポイントで資料をまとめ、発表するのは大変だったが、とても貴重な体験となった。興味を持つ内容を調べ、分析し、自分の考えをまとめる体験は、社会に出ても役立ちそうだ。
- 授業の中での発言機会やプレゼンテーション機会は、これから就活するにあたり、とても役立つ経験となった。今まで意識していなかった就職についての具体的なイメージが持てたことが何よりも貴重だった。

連携課題研究

《宮原 佑貴子》 (2019年度 新たに開講)

京都の伝統染織産業の技術を体験し、現代に活かす

授業の到達目標

- 京都の伝統的染織産業の技術と背景についての知識を得る。
- 染織技術を体験し、固有の魅力や特色について知る。
- 参加体験型のイベントを計画し実施する。
- 個人テーマをもって、自主的に取材調査を進め、課題に応じたプランの構想をおこなう。

授業計画

1. オリエンテーション: 京都の伝統染織産業と京都女子大学の取り組み
2. 工房訪問
3. 工房訪問
4. 連携課題の整理と分析
5. 参加体験型イベント(ターゲットの設定、手法についての計画)
6. 参加体験型イベント(実施計画、プロモーション計画)
7. 個人テーマのためのリサーチ発表
8. 参加体験型イベント(準備、ロールプレイング)
9. 参加体験型イベント(プロモーション)
10. 参加体験型イベント(開催の設営)
11. 参加体験型イベント(実施)
12. 参加体験型イベント(参加者への調査、聞き取り)
13. 調査結果のまとめ、分析
14. 個人テーマに沿った提案書制作
15. プレゼンテーション、合評、ディスカッション

2017年度から開講している女性地域リーダー養成プログラムは、各学科・専攻で修得した専門性に加えて、地域課題の発見能力、問題解決能力、実践力を備えた行動できる女性、地域リーダーとなりうる女性の養成を目的としている。2018年度は、11科目が開講され、2019年度入学生からは、共通領域副専攻プログラムとなることが決定している。

平成30年度 学まち推進型連携活動補助事業一覧 (連携プロジェクト)

事業名	申請者	連携先	イシュー別4領域のうち該当する領域
京都刑務所「矯正展」における 造形ワークショップ“ワクワク木育キャラバン”	矢野 真	京都刑務所	②安心安全・まちづくり支援
「祇園祭小型鉾」修復プロジェクト	前崎 信也	(株)美也古商会 (株)岡墨光堂 他	③京都・東山の歴史と文化
京都の伝統染織産業と人の輪をつなぐ ネットワーク	青木 美保子	山元染工場 綴織技術保存会奏絲綴苑 (株)マドレー 生活デザイン研究所	④京都の産業支援
音楽による地域貢献プロジェクト 音楽ふれあい隊	田中 純	NPO法人 音の風 東山区社会福祉協議会	①子育てと高齢者支援
東山区における自主防災活動と町内会運営 の実態に関する実証的研究	奥井 亜紗子	東山消防署	②安心安全・まちづくり支援
「祇園新橋に生きる女性たち」 聞き書きプロジェクト	森久 聡	祇園新橋住民及び商店経営者	③京都・東山の歴史と文化
増補改訂版 「写真に見る京都・馬町空襲被害地図」	坂口 満宏	馬町空襲を語り継ぐ会 東山区総合庁舎	③京都・東山の歴史と文化
福祉施設の高い技術と地域の特性を活かした 商品共同開発および情報発信	宮原 佑貴子	社会福祉法人 白百合会	①子育てと高齢者支援 ②安心安全・まちづくり支援 ④京都の産業支援
第2回KWU小学生プログラミングコンテスト	丸野 由希	京都市内の小学校	①子育てと高齢者支援 ④京都の産業支援
京女まち歩きオープンデータソン	桂まに子	京都市東山図書館 京都府立図書館 オープンデータ京都実践会	③京都・東山の歴史と文化
京都女子大学親子支援ひろば 「ぴっぴらんど」	瀬々倉玉奈	市内保健センター 児童館など	①子育てと高齢者支援 ②安心安全・まちづくり支援

京都刑務所「矯正展」における造形ワークショップ “ワクワク木育キャラバン”

●連携先：京都刑務所

発達教育学部児童学科 教授 矢野 真

開催場所：第41回京都矯正展（京都刑務所）

日 時：平成30年10月27・28日の2日間

27日（土）：10:00～16:00

28日（日）：10:00～15:00

内 容：学生のデザインによる「状差し＆ペン立て」制作
（先着400名）

参加学生：矢野ゼミ3・4回生と2回生。21日18名、22日21名

実施の背景と目的

京都女子大学と京都刑務所の連携協定の一環として、「木育」を中心とした造形ワークショップを行っている発達教育学部 児童学科・造形（矢野）ゼミでは、京都刑務所内の作業所で作られる、子どもが使用する木工玩具のデザインを通して連携を行うこととなった。それに関連した事業として、平成28年、29年度における京都矯正展に造形ワークショップを開催し、本年度は3回目の実施となる。

平成29年度の「木のトレーづくり」では、単価コストが高く、木地を数多くつくるができなかったため、今回はコストの見直し、また学生からのデザインについての提案（どのような年齢の方々に、どのようなデザインが好まれるのか）等を考慮しながら木地づくりを作業所と相談の上、依頼・制作した。

具体的に、本連携事業では樺材を利用した“状差し＆ペン立て”を11名の学生（4回生）がデザインし、そのデザインをもとに刑務所（受刑者）に木地の制作を依頼した。その木地を使用して造形ワークショップを行い、地域住民に作品づくりを楽しんでもらうといった内容を検討し、実施した。



写真1 学生がデザインした“状差し＆ペン立て”

実施内容

今年度は天候にも恵まれ、地域住民の来場者が多いことが見込まれた。昨年度は材料不足となったように、“状差し＆ペン立て”となる木地がどのくらいのペースでなくなるかということ算定し、200個ずつ2日間に分けて行うこととした。

<実施1日目・27日>

“状差し＆ペン立て”の制作工程は、参加者が状差しとなる箇所を自由に決め、鋸を使って切り込みを入れる。そして、用意した鉋（かんな）や木工やすりを使って角を丸め、最後に紙やすりを使って仕上げるといった工程である。



写真2 鋸で切り込みを入れる



写真3 鉋で角を落とす

実施1日目、14時頃には200個用意した“状差し＆ペン立て”の木地がなくなってしまったため、2日目の木地から40個ほど追加したが、15時にはすべてなくなってしまった。無料ということも影響し、参加者は多く、楽しく制作に取り組んでいる様子を窺うことができた。参加した学生たちも、普段接する子どもだけでなく、大人との世代間コミュニケーションを楽しんでいる様子が窺われた。

<実施2日目・28日>

1日目に40個追加してしまったため、13時にすべての木地がなくなってしまった。しかし、参加者の普段あまり手にすることのない鉋を使用することが楽しかった様子が窺われ、盛況であったように思われる。



写真4 全体の様子



写真5 完成した子どもの作品

実施による成果

「矯正展」における学生たちの学びの姿について検討するため、ワークショップ終了後に学生から提出された報告書を分析した。

ワークショップは「学生がトレーのデザインを考える」→「京都刑務所の木工部がそれを加工する」→「それを使って参加者（市民）が作品を完成する」という流れで実施されている。そこで、実践の目的に対応し、記述の特徴を以下の視点でカテゴリー化し、さらにそれぞれに下位カテゴリーを生成した。

- ① 矯正展(ワークショップ)における学び
- ② 作品制作(デザイン)
- ③ 刑務所や受刑者の印象や理解

さらに、矯正展の経験による差異を検討するため、矯正展を初めて経験した3回生(以下1年目)と、昨年に続き2回目の経験である4回生(以下2年目)との記述を比較することとした。

① 矯正展(ワークショップ)における学び

矯正展における学びは、「参加者の理解」と「参加者への支援」「運営を通した学生同士の学び」に大別できた。

まず、「参加者の理解」について、参加者の道具の使用についての気づきが述べられている。さらに、年齢層が広いこと(高齢者から幼児まで)や、別のイベントと比較により、対象や環境の違いにより対応を変える必要があることを実感していたことが窺われる。

「参加者への支援」については、参加者とのかかわりを通して制作における支援についての様々な気づきや学びが述べられている。1年目の学生の中には支援に難しさを感じている記述も見られる。これに対して、2年目の学生においては、子どもの主体性を尊重することなど、より教育的な配慮への気づきが述べられている。さらに、支援を通して参加者に矯正展の意義を伝えることの重要性を指摘する意見も見られた。また、支援を通して自分自身の成長を感じている記述も見られている。

「運営を通した学生同士の学び」について、学生は企画を運営することを通して、先輩の姿をみたり、学生同士で連携したりすることの重要性を学んでいることが窺われた。また、2年目の学生の中には、今回の学びを次に引き継ぎたいという記述も見られた。

② 作品制作(デザイン)

作品制作に関する事柄については、「デザインについての学び」と「制作の充実感」に大別できた。

まず、「デザインについての学び」については、参加者の年齢層を踏まえることについての気づきが述べられている。さらに、学生同士が協力することの必要性が挙げられている。2年目の学生の記述において特徴的なこととして、昨年の反省を踏まえ、デザインや工程を工夫し、より対象者に配慮していることが窺われた。

「制作の充実感」については、自分自身のデザインが作品になることや、自分のデザインが認められることにより、喜びや充実感を感じていることが窺われる。

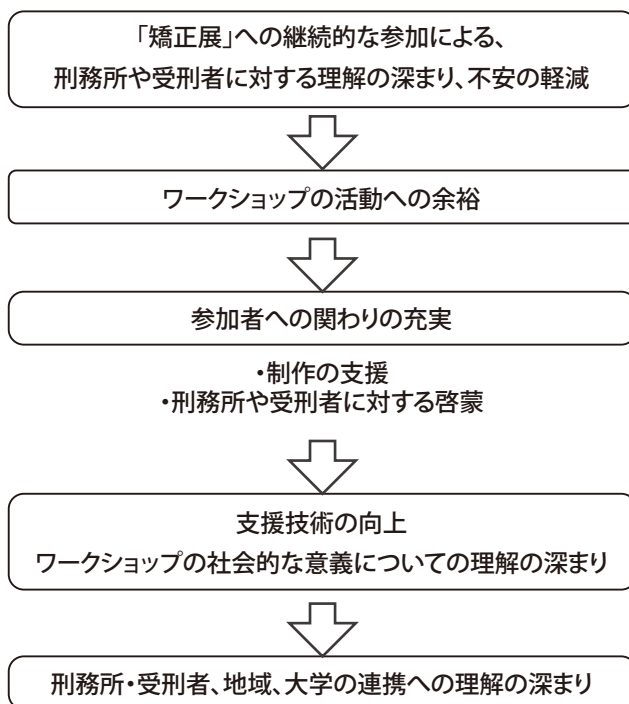
③ 刑務所や受刑者の印象や理解

次に、2年目の学生の記述から、多くの学生が既に昨年参加した時点で刑務所や受刑者についての不安は軽減されており、刑務所や受刑者と連携することがスムーズにできていることが窺われた。その上で、自分自身が刑務所や受刑者について理解するだけでなく、刑務所と地域のつながりが重要であることや矯正展を通じて自らが参加者への理解を促すことの意義を感じていること、そのためには自分自身が刑務所との連携にネガティブな印象をもってはいけないうる意見も見られている。このように、2年目の学生は、昨年の経験を踏まえながらより深くワークショップの意義を理解していると考えられる。

但し、不安が完全には払拭できていないことが窺われる記述も見られている。

まとめ

2年目の学生の記述の特徴や、1年目の学生のそれとの比較から、「矯正展」への継続的な参加による学生の成長について、以下のようなことが明らかとなった。



「祇園祭小型鉾」修復プロジェクト

●連携先：株式会社岡墨光堂、仏像彫刻工房宮本工藝、漆芸工房表望堂

家政学部生活造形学科 准教授 前崎 信也

1. プロジェクトの概要

株式会社美也古商会が所蔵する祇園祭小型鉾は日本画家・吉川観方（1894-1979）監修の元、同社創設者である吉川志江により制作された。昭和6年（1931）に完成したとされている計7基の鉾（長刀鉾、船鉾、鶏鉾、放下鉾、月鉾、函谷鉾、岩戸山）は、毎年祇園祭の頃に大丸京都店で展示されている。木工、染織、漆工などの様々な分野の工芸品を複合的に組み合わせることによって精巧な形状を保っているが、完成から90年近くが経過し、痛みが目立つようになった。小型とはいえ京都の職人が当時の最高の技術を駆使して制作したことが事前の調査で明らかになっており、祇園祭の歴史だけではなく昭和初期の京都の工芸技術を知る上でも極めて貴重な資料である。そこで、2018年から「祇園祭小型鉾」修復プロジェクトとして、多様な工芸分野の技術を連携させることによる修理プロジェクトを立ち上げる大規模な修復作業を行うこととなった。

このような、近代に製作された生きた工芸品をいかに修復したのかを記録することは、今後の文化財修復のモデルケースとなることが期待される。そこで京都女子大学の学生が本プロジェクトに記録・広報担当として参加することとなった。

本プロジェクトに携わった学生は阿部亜紀・大橋愛子・小野瑞佳（家政学研究科生活造形学専攻1回生）、北山明乃・高野麗（家政学部生活造形学科4回生）の5名である。今年度の活動は以下である。まず、それぞれ人形と漆の修復を担当した仏像彫刻工房宮本工藝、漆芸工房表望堂を取材し担当者にインタビューを行った。7月の山鉾巡行に合わせて京都大丸本店で小型鉾が展示される際には、組み立て・展示を取材。更に、今年度集中して修復された船鉾については、歴史的な考証も試みた。昭和6年の小型鉾製作時の船鉾の状態を知るために、当時の船鉾の資料と比較し、どの程度正確に再現されているのかを調査した。上記の成果を効果的に発信するために、Facebook、Twitter、Instagramで活動を配信。更に、今年度の活動をまとめた小冊子『祇園祭小型鉾修復プロジェクト』を制作した。

2. 株式会社岡墨光堂

本プロジェクトを主導する株式会社岡墨光堂を訪れ、学生が修復前の小型鉾について、同社代表取締役の岡岩太郎氏と修復担当者から精巧につくられた懸装品などを鑑賞し破損している箇所をどのように修復するのか解説をうけた。



修復前の小型鉾の見学

3. 仏像彫刻工房宮本工藝

7基の小型鉾に乗る計120体の人形の修復を担当している宮本工藝代表の宮本我休氏を訪問し取材を行った。京都・西山で宮本工藝を営む宮本氏は、仏像・仏具、その他木彫刻全般の研究・制作を行っている。

宮本氏によるとこれらの人形は細部の作り込みが素晴らしいという。一体一体に玉眼が入っており表情も異なり、歯や舌の細部までとても細かく仕上げられている。関節も違和感なく完璧に製作されていることが、制作者の技術と力量を表している。



欠損した手の復元

修復は主に手と足である。特に手は、笛などの小道具を持つため破損しやすく、完全に欠損しているものもあった。強度のある現代の合成樹脂と、貝殻を砕いて白い粉末にし

た「胡粉」を、欠損している部分に盛り付け、固まったら、彫刻刀やヤスリで元の形に削り出す。その後の色付けでは新しく色を塗った場所が綺麗になりすぎて目立つため、わざと汚れたように見せる「古色」を付ける。

4. 漆芸工房表望堂

鉾の屋根や柱部分は漆で仕上げられている。長年の使用や経年劣化によるひび割れや剥落した漆の修復を担当するのが、漆芸工房表望堂の中道陽子氏である。氏は仏像などの文化財修復を手掛けるほか、金継ぎ教室の講師や漆を用いたインテリアグッズの制作など、活動は多岐に渡る。漆は適切な環境下であれば300年も長持ちする耐久性に優れた素材で、木や竹だけではなく、陶磁器やガラスなど、水と空気以外の素材なら何にでも塗ることができるのだという。

修復の手順は、まず表面を覆っている油汚れを取り除くためにアルコールを染み込ませた脱脂綿で拭く。次に漆を上から塗り直して、乾いたら表面を研磨して艶を出すというものである。ここでも人形の修復と同じように、直したところが綺麗になりすぎないようにすることが難しいということであった。今ある姿や昔の雰囲気の後世に伝えるために、「完璧に直さないことを心掛ける」という言葉が印象的であった。



拭いて汚れを除去する

5. 小型鉾の組み立てと展示

祇園祭小型鉾は、毎年祇園祭の時期に大丸京都店で展示される。平成30年7月18日、閉店後の店内で組み立てと設置が行われた。10年以上の経験を持つベテラン3名が組み立てを担当。マニュアルはなく、たくさんの箱に分けて保管されている部品を、記憶と経験を頼りに組み上げていく。小型鉾を設置するためのディスプレイの設営も同時に行わ

れ、かなり慌ただしい雰囲気の中で作業が進められた。翌日から多くのお客様が小型鉾を一目見ようと大丸京都店に訪れた。



大丸京都店 小型船鉾の展示

6. 船鉾と船鉾の小型鉾の装飾に関する検討

今年度のプロジェクトでは長刀鉾と船鉾を中心に修復が行われた。船鉾の資料調査を長年行っている立命館大学大学院文学研究科の佐藤弘隆氏にお話を聞くことができた。小型鉾が制作された2年後に撮影された船鉾の写真と映像が現存していることが分かった。

映像と小型鉾の装飾を比較した結果、小型鉾の完成度はとても高いことが明らかとなった。佐藤氏によると、側面の波の刺繍、鉾の後方についている櫓檣（ともやぐら）の形、欄干、車輪の組合せ方など、実際の船鉾をよく再現している。しかし、詳細は異なる点も少なくない。刺繍のモチーフなどは本物の船鉾と同じものを使用しているが、描かれている動物の表情や向きが異なっているものがよく見られるため、実物を見た人が記憶を頼りに作ったのではないかと推測されたとのことであった。

7. プロジェクトの成果発信

上記の取材・調査の成果を発信するためにSNSを活用した。当初からFacebook、Twitter、Instagramに特設アカウントを開設し取材の様子を配信。更に、一年間の活動をまとめた小冊子『祇園祭小型鉾修復プロジェクト』を制作し、関係各所に配布する予定である。

京都の伝統染織産業と人の輪をつなぐネットワークづくり

●連携先：山元染工場 綴織技術保存会奏絲綴苑 (株)マドレー 生活デザイン研究所

家政学部 生活造形学科 准教授 青木 美保子

1. 本プロジェクトの背景にある問題と趣旨

京都の伝統産業には、京友禅、西陣織に代表される着物の製造があり、そこには着物の和装文化とともに長い年月をかけ培ってきた世界に誇れる染織技術が存在する。しかし、生活スタイルの変化や、日ごろの装いと乖離した購買価格などの理由から、特に若年層を中心とした「着物離れ」が進んでおり、着物製造業の存続が危ぶまれている。また、染織産業に携わる職人においては、こういった需要の低迷によって、伝統的な高い技術を継承するための後継者不足も深刻な問題となっており、これからの世代を担う若者への周知は今後益々必要な課題であると考えます。

そこで、地域産業への貢献となり得る活動を目指し、京都女子大学の学生が中心となり、伝統染織産業の様々な職人の方と手を取り合いながら、伝統産業を楽しみながら知ることができる仕掛けづくりをおこなうことを本事業の目的とした。加えて、本学生活デザイン研究所の協力を得ながら、生活造形学科や現代社会学科など学科の枠を超えて多彩な学生を集め、デザイン提案や伝統技術の調査などにおいて様々な側面からアプローチすることは、学生同士が切磋琢磨しながら学びを得ることにもつながるという副次的効果を狙った事業でもあった。

2. 協力団体・企業と学生メンバー

以下3つの団体・企業に協力を仰いだ。

参加学生は30名であった。

- ①綴織技術保存会 奏絲綴苑
- ②山元染工場(ケイコロール)
- ③株式会社マドレー

3. 活動内容

主な活動としてワークショップを計画した。学生達は、昨年度一年の活動を通して、ひとつの学びを得た。それは、「商品開発だけでは『伝統染織』の価値を伝えることができない」ということであった。この学びをもって、今年度は、染織産業に関わる方が一般の方に伝統の染織技術を伝授するイベントを企画したのである。以下、活動の詳細である。

3-1 工房見学

ワークショップを計画するにあたり、どのようにして、ワークショップ参加者に伝統染織のすばらしさを伝えるか、その方法を案出するため、各工房の見学を行ない、職人さんたちの技術を拝見し、実際に技法を体験したり、インタビューしたりした。

①綴織技術保存会 奏絲綴苑(2018年6月26日)

気の遠くなるような緻密で繊細な作業に、感動。綴れ織が高級品という理由にも納得。



②山元染工場(ケイコロール)(2018年6月13日)

山元桂子氏の技とセンスで、伝統の型染からこんなにも若者に人気の商品が創作されることに、大きな学びを得ることができた。



③株式会社マドレー (2018年6月19日)

昭和期に人気を博しながらも消滅していたマドレー染、近年復活したその染色技法を体験させていただいた。



3-2 商品開発・藤花祭出展

①商品開発

学生メンバーは、ワークショップの計画と並行して、伝統染織の生地を使った商品を開発し、それを藤花祭に出展することで、伝統染織品に関するマーケティングをおこなうことを計画し、夏休み中に、綴れ織、ケイコロールの生地、マドレー染生地を使った服飾雑貨の商品開発および制作を行った。



②藤花祭出展

月日:11月2～4日

会場:本学S校舎 エントランス

伝統染織を活かしたアクセサリーを販売するとともに、その技術を動画で紹介することで、ワークショップの広報に繋げることができた。



以下、ワークショップ当日の様子



①綴れ織《ミニチュア糸巻きのチャームづくり》



②型友禪《型染のトートバッグづくり》



③マドレー染《マドレー染のハンカチづくり》



3-3 ワークショップの開催

藤花祭終了後、学生達は、すぐにワークショップで制作する作品の下準備や、工房に伺い当日のお手伝いの方法を学ぶなど、綿密な準備を行ない、以下のような内容のイベントを遂行した。

【染・織 ものづくり巡りワークショップ】

日程:2018年11月11日(日)

場所:日進月歩CULTURE LAB(株式会社マドレー)

(3種の体験を30分毎に回遊する。)

募集人数:2部制、各15名、計30名

参加人数:各9名、計18名

活動スタッフ:準備30名、当日18名



▲オリジナルのタグとスタンプ
(デザイン:生活造形学科学生
玉置 実侑)

◀ワークショップチラシ
(デザイン:生活造形学科学生
佐藤静香)

4. まとめ

藤花祭とワークショップを通して伝統染織の魅力を若い方々に伝えることができた。そして、学生達は活動の意義を見出し、多くのことを学ぶとともに、あらためて染織の魅力を感じてくれ、大変有意義な活動となった。

音楽による地域貢献プロジェクト 〈京女音楽ふれあい隊 京女の“音楽”宅急便〉

●連携先：京都市東山区社会福祉協議会・NPO法人「音の風」

発達教育学部教育学科音楽教育学専攻 教授 田中 純

実施の目的

本学音楽教育学専攻は、西洋クラシック音楽を中心に、音楽作品を理論的に探求し、感性豊かに表現する事を目指して、日々研鑽を積んでいる。本プロジェクトは、大学での学びを社会の様々な場面で活かす事を学ぶプロジェクトである。活動を通じて地域に根ざす課題や可能性を認識し、その上で、専攻の学びをどのように生かす事ができるかを主体的に探求する事、卒業後にそれぞれの居住する地域で、生涯生かす事のできる「音楽を媒介としたコミュニケーション力やマネジメント力」「自己プロデュース力」を身につける事が期待できる。

概要

NPO法人「音の風」が京都市東山区社会福祉協議会と連携して活動の場としている社会福祉施設へ、音楽教育学専攻のゼミをベースとして構成した学生グループが訪問し、音楽による交流を行う。(本学卒業生であるNPO法人「音の風」主宰者の西野桂子氏にコーディネーターとして関わっていただいた。)

◆11月10日(土)

有済学区健康すこやか学級「京女の“音楽”宅急便」

有済学区では毎月第二土曜日に、元有済小学校内サロンにて「有済すこやか学級」が開催されている。その音楽レクリエーション交流として、京都女子大学音楽教育学専攻3回生声楽ゼミ生およびピアノゼミ生有志を中心とした9名の学生が活動を行なった。発声デモンストレーションで参加者との音楽的交流をはかりながら、歌詞カードを配布して季節にまつわる合唱や懐かしい日本の歌を共に歌うなど、音楽を通して繋がりを感ずることができた。《旅愁》や《ふるさと》などは、参加者の皆様が涙を浮かべながら一緒に歌ってくださり、世代や立場を越えて音楽がもたらす力、言葉がもたらす力をあらためて実感する有意義な交流の場となった。



有済学区健康すこやか学級

◆11月10日(土)

貞教ふれあい福祉まつり「京女音楽ふれあい隊」

貞教学区では、毎年〈貞教ふれあい福祉まつり〉が、元貞教体育館で地域の方々の交流の場として開催されている。これは、地域のお祭りと福祉団体のバザーのコラボレーションで、音楽演奏、アトラクション、防災・交通安全講習などが行われる。その中の一つのプログラムとして、京都女子大学音楽教育学専攻4回生「アンサンブル研究2」の受講生15名が参加し、声楽アンサンブル、ピアノ連弾、合唱を演奏発表した。コンサート会場ではなく体育館、また、周りで物品販売などが行われている音楽環境としては、あまり良くなかったにも関わらず、学生たちは、演奏に集中し、日頃の研究成果を存分に発揮した。真ん中に設置された長椅子に座り、学生達の演奏を最初から最後まで熱心に聴いてくださった方が、相当の数いらっしゃった事からもそれが実感できた。「近くでこんな素敵な学生さん達がいらっしゃって音楽を勉強されてるなんて知らなかった」という声を聞いたことから、やはり地域でのこのような活動の重要性を感じた。この活動で、学生の自主性、チームワーク、実行力を垣間見れた事が、大きな収穫であった。



貞教ふれあい福祉まつり

◆11月16日(金)

ケアセンターいまくまの「京女音楽ふれあい隊」

京女から徒歩5分程のところにある「ケアセンターいまくまの」において京都女子大学音楽教育学専攻声楽ゼミ4回生8名が、活動を行なった。発声デモンストレーションで施設利用者と一緒に声を出し、まずは打ち解け、二重唱や合唱を演奏した。歌詞カードを配布し、利用者の方々のみならず職員の方々とも共に歌い、学生もとても素敵な表情で演奏できた。一緒に音楽を楽しむ事で、世代、立場を超えてその時間を共有できる事を学生が肌で実感できた事は、学生にとって大変有意義であったと言える。日頃の学習の成果を発表することの大切さ、音楽の力を再確認でき、この経験は、

卒業後のそれぞれの立場での仕事に大いに生かされると確信している。利用者の方から「長生きしてよかった」「こんなに美しい音楽を聴かせていただけるなんて幸せだった」等の感想が寄せられた事を付け加えておく。



ケアセンターいまくまの

◆12月19日(水)

修道学区すこやかサロン「京女の"音楽"宅急便」

修道学区では毎月第三水曜日に、東山総合支援学校内の修道ふれあいサロンにおいて「修道健康すこやかサロン」が開催されている。その音楽レクリエーション交流として、京都女子大学音楽教育学専攻4回生声楽8受講生およびピアノ8受講生を中心とした14名の学生が活動を行なった。クリスマスの時期ということもあり、学生は各々に衣装に工夫を凝らして雰囲気盛り上げ、参加者の皆様も大変喜んで下さった。発声デモンストレーションで参加者との距離を縮め音楽的交流をはかったあと、歌詞カードを配布して季節にまつわる合唱やリコーダーアンサンブルによるクリスマスの定番曲を演奏した。職員の方々も一緒に参加くださり歌詞カードをもとに一緒に歌いながら、世代や立場を越えて音楽がもたらす力をあらためて実感する有意義な交流の場となった。



修道学区健康すこやかサロン

実施による成果

4箇所の福祉施設(内一箇所は、体育館)において声楽や、合唱、ピアノ連弾、リコーダーなどによるコンサートを開催した。単なる音楽の披露だけではなく、施設利用者、地域の方々との音楽を通しての交流を図る事で、専攻での学びの成果を活用する事ができ、学生にとって、学内では得る事ができない大変貴重な経験(学びの場)となった。また、学生達は、この活動を通じて、地域に根差す課題や可能性を認識し、専攻での学びをどのように活かす事ができるかを探索し、再確認できたと考えられる。結果、「音楽を媒介としたコミュニケーション力やマネジメント力」「自己プロデュース力」の育成に寄与した。

今後の課題

東山区社会福祉協議会が実施している「健康すこやか学級」の年間予定(曜日時間)が各学区ごとに決められている。この「健康すこやか学級」において当活動を実施するには、この日程に合わせる事が必要である。つまり、参加希望学生達の空き時間、講義時間、引率教員の空き時間を調整する事が、大変困難な作業である。今後は、年度初めすぐに活動計画を立て、当協議会との交渉を早急に実施する事が必要である。また、NPO法人「音の風」主宰者の西野氏のご協力も続けて仰ぎたいと考えている。

また、今回活動した「福祉まつり」のような地域の活動、ケアセンター(福祉施設)などにも積極的に参加していくべきであろう。

このようなプロジェクトは、継続する事が重要であり、それにより地域の方々や福祉施設の利用者の方々や学生達、大学との交流(連携)が一層深まり、相互の生活環境を良好にしていく事が期待される。

東山区における自主防災活動と町内会運営の実態に関する実証的研究

●関係先: 東山消防署

現代社会学部現代社会学科 准教授 奥井 亜紗子

1. プロジェクトの目的

本企画は昨年度「東山区における町内会運営の現状と防災活動に関する調査研究」の継続プロジェクトである。

自主防災組織とは「地域住民の連帯に基づき自主防災活動を行う組織で、防災巡視、資機材等の共同購入等を行っており、災害時には初期消火、避難誘導、救出・救護、情報の収集・伝達、給食・給水、災害避難箇所等の巡視等を行う」組織である（総務省『消防白書』）。1995年の阪神・淡路大震災を機に、国のテコ入れで結成が促進されたこの自主防災組織は「町内会」を単位として組織化されていることで知られる。

京都市は1999年に自主防災会設置率100%を達成している。しかし、本学が位置する東山区は高齢化率30%を超える都市型超高齢化社会であり、近年は町内会運営の担い手不足が顕在化しており、町内会を基盤とした地域防災のあり方にも幾多の課題を抱えていることが予想される。

以上の問題関心に基づいて、本プロジェクトでは、東山区下全自主防災部長を対象とした調査票調査を実施し、自主防災活動と町内会運営の実態の把握を目指した。

2. 調査の概要

調査は2018年2月～3月に、東山消防署の協力のもと、各学区自主防災会長を通じて調査票の配布・回収を行った。配布数324通、有効回答数213通、全体回収率は63.6%である（学区により部長への配布・回収方法は微妙に異なるが、本学が位置する修道学区ではほぼ100%の回収があったことは備考として追記しておく）。6割を超える回収率は各学区自主防災会長及び東山消防署職員のご尽力の賜物である。特筆すべきは回収した調査票のうち36.6%（78通）と3人に1人の自主防災部長が自由記述欄に意見を記入していた点である。この記入率の高さからは、少なからぬ自主防災部長が役割について色々と思うところがあるという、一種の焦燥に似た意識を窺取できよう。

調査項目は大きく分けて①防災活動の現状と意識、②民間指定避難所をめぐる意見、③どのような人がどのような思いで自主防災部長を務めているのか、④所属町内会の現状、の4点である。

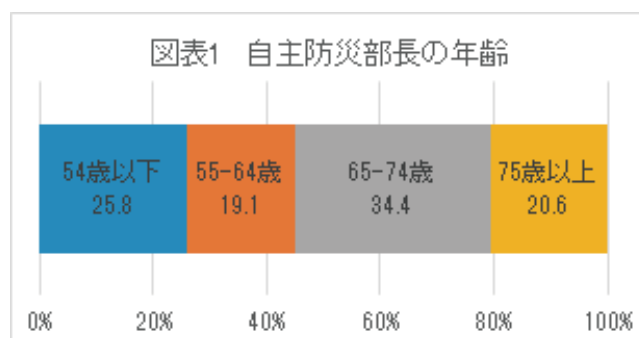
3. 結果の概要

（1）自主防災部長の高齢化と人材不足

はじめに、自主防災部長の基本情報を示しておこう。回答者のうち男性74.6%、女性25.4%で4人に1人が女性、有職

者が68.1%を占める。自主防災部長を務めている期間については、「10年以上」の長期にわたって務めている者は団塊世代を中心に17.2%を占めるが、一方で、「一年未満」（38.1%）が約4割、「2年目」（14.7%）を合わせて過半数となっており、輪番で役を回している様子がうかがえる。

年齢内訳をみたところ（図表1）、65歳以上が過半数を占めており、75歳以上の「後期高齢者」が5人に1人を占めている事実が明らかになった。輪番制で部長を務める80代の回答者からは「85歳で人を助けることができますか?」「何もできない年齢に達しています。」といった「悲鳴」に近い声が自由記述欄に書き込まれている。



年齢を問わない輪番制の背景には町内会の人材不足がある。前述したように自主防災組織は「町内会」を単位として組織化されてきたが、伝統的に「町」の単位が強く残る京都市の町内会は、同規模の他都市に比較して町内会の規模が小さいため、なおさら町内での人材確保が難しくなることが推察される。実際、東山区における自主防災部の組織単位は「一町内会」単位が74.0%と全国94.5%（平成28年4月1日現在）に比較して低く、「一つの学区の中の複数町内会」単位（19.7%）が約2割に上っており、小規模町内会単位での組織化が難しい様子がみてとれた。

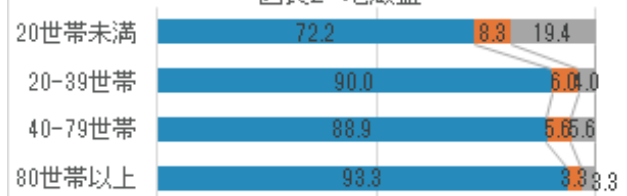
組織単位別に防災活動の実施状況をみると、「避難訓練」や「町内パトロール」、「防災マップ」や「緊急連絡網」の作成といったリーダーシップを取る存在が必要と思われる項目で、一町内会単位より複数町内会単位のほうが実施率が有意に高くなっており、また自主防災部長の不安（「災害時救援側に回れる住民がいるか／避難用の機材を使いこなせるか／担当地域の住民の安全確認ができるか」）も総じて一町内会単位のほうが強い結果となっている。不安感については、対象範囲が広がることにより役職が形骸化しているという可能性も考慮する必要があるが、町内会を基盤とした自主防災組織の運営には課題が多いことが示されている。

（２）所属町内会の現状

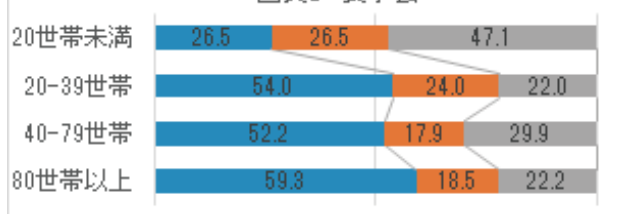
本企画は当初、自主防災部長は町内会長と兼任もしくは町内会長経験者が多数を占めるという予想のもと、所属する町内会の現状について問う項目を作成した。しかし、結果をみると42.5%が町内会長職未経験者であり、町内会の世帯数を問う項目も無回答がやや目立ったことから、自主防災部長は町内会の要職を必ずしも経験していないことが明らかとなった。

図2～4は所属町内会の活動状況を町内規模別にみたものである。これをみると、地蔵盆は20世帯未満の町内会でも7割超が「ある」と答えており、依然高い実施率を維持しているものの、食事会になると「以前はあったが今はない」の回答が増え、実施率は20世帯以上規模でおよそ半数、20世帯未満では26.5%と3割を切っている。さらに日帰り旅行等リクリエーションになると、20世帯未満では7割超がもと「ない」であるが、20世帯以上では「以前はあったが今はない」という回答が多く、半数前後に上っている。ここからうかがえるのは、小規模自治会では以前から行事が少ないか縮小取りやめが進んでいたであろうこと、そして20世帯以上規模の町内会では、現在、かつては行われていたものが急速になくなっていく過程にある様子である。

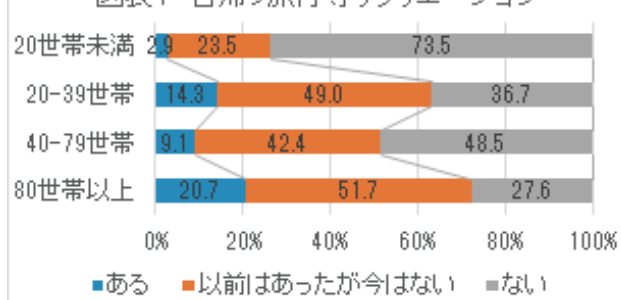
図表2 地蔵盆



図表3 食事会



図表4 日帰り旅行等リクリエーション



こうした状況下、「町内会運営を継続していくのは困難だ」という意見に対して、「あてはまる」(16.8%)「ややあてはまる」(39.7%)と過半数(20世帯未満の小規模町内会では7割超)が、町内会運営の継続は厳しいと考えていることが分かった。「想像した以上の『少子高齢化』が進行し、今のような形の『町内会』がいつまで存続していけるのか危惧しています」「〇〇町はここ10～15年でなくなるでしょう。」といった自由記述からも、自主防災部長が存続の危機を肌身を感じている様子がうかがえよう。

（３）民間避難所への意見

最後に、本学は京都市の指定避難所となっているが、自主防災部長は民間の指定避難所についてどのような認識を持っているのだろうか。複数回答で問うたところ、そもそも「民間の指定避難所があることを知らなかった」が31.5%と3人に1人を占めており、「食料や物資などがどの程度備蓄されているのか知りたい」が53.8%、「行ったことのない施設に避難するのは不安だ」45.7%など、情報不足や関係性の希薄さを懸念する意見が多くみられた。「施設側が学区民の出入りを好まれていないのでは」という書き込みもあった。地域に開かれた施設であること、また災害時対応について地域と日常的な情報共有をしておくことは、地域連携を推進する本学にとっても喫緊の課題であるだろう。

4. おわりに

2018年度は大阪北部地震に始まり、豪雨や台風など多くの災害に見舞われた一年となったが、東山区フィールドワークに参加した学生達と共に今回の結果を分析するなかから見てきたのは、町内会を基盤として地域防災を考えることがいよいよ困難になりつつあるという厳しい現実である。地域防災、地域包括ケアシステムと、政策的にはより一層地域社会に期待をかける方向性が打ち出されるなか、我々はともすれば、その「地域」の足元がまさに瓦解しつつあるという現実から目を背けてしまいそうになるが、現在の地域社会をぎりぎりのところで支えている団塊世代が後期高齢者に突入するのは時間の問題である。地域の基盤として限界を迎えつつある町内会の実態を認識することは、それに代わる地域基盤そして地域防災のシステムの在り方を模索する第一歩となるであろう。

「祇園新橋に生きる女性たち」聞き書きプロジェクト報告

●関係先：祇園新橋住民及び商店経営者

現代社会学部 現代社会学科 准教授 森 久 聡

はじめに

本プロジェクトは祇園新橋地区に住み続けていたり、商売に携わっている女性のライフヒストリーの聞き書きを行い、ライフヒストリーから見えてくる祇園新橋の姿を多角的に描くものである。昨年度から継続して取り組んでいるプロジェクトである。そのため、本プロジェクトの意義と学問的な可能性、そして教育的な意義については重複するので、省略させていただく。詳しくは昨年度の報告書を参照して欲しい。



図 2017年度に実施した調査対象者のライフヒストリーの冊子

2018年度の取り組みの経過

今年度も昨年度と同様に、現代社会学部の演習科目である「演習2」(2回生後期)を拠点に一連の現地調査を実施した。まず教室で行う座学として、社会学の入門書として舩橋晴俊(2008)を講読し、ヒアリング調査の方法を学ぶために岸ほか(2016)を講読した。また、伝統都市としての京都に関する予備知識を増やすために、鯨坂・小松(2008)を講読した。これらの文献講読は他は全員で同じ課題に取り組んでいる。

また文献講読と並行して、祇園新橋の伝統的な祭礼行事である「お火焚き祭り」にも参加し、のぼりの設置などの準備と後片づけなどを手伝った。このように地元文化を肌で感じる機会を増やすだけでなく、わずかな時間ではあるが少しでも地元住民との交流を重ねるようにつとめた。

以上の準備を経てヒアリング調査を実施するが、実施にあたっては履修者18名を4つのグループに分けてヒアリングに取り組んだ。4人の方にヒアリングをお願いしたが、一人方は残念ながら都合がつかずヒアリングを実施することができなかった。ヒアリングはいずれも祇園新橋周辺の場

所で行われた。ヒアリングの時間は一人およそ1時間30分ではなくは2時間ほどヒアリングに応じてくださった方もいた。いずれの方も、はじめは緊張されていたが話し始めて緊張もほぐれると楽しそうに話をしていただいた。今回、ヒアリングに応じて下さった方は、祇園新橋地区の住民および商店経営者などである。呉服店を営んでいる方、鍋料理の飲食店の女将、酒屋の経営者の方である。祇園新橋地区の中で生まれ育った方もいれば、結婚を機に祇園新橋に来た方などにヒアリングすることができた。

2018年度のヒアリングから見えてきたもの

昨年度に実施した4人のヒアリングと今年度実施した3人の計7人のヒアリングで何が見えてきたのだろうか。まだ確信を持って言えることは少ないが、昨年度のヒアリングで見えてきたことに沿って、仮説的にいくつか述べておきたい。

昨年度のヒアリングで見えてきたことの1つは祇園新橋といっても芸舞妓だけの世界ではないということであった。祇園新橋に生きる者がみな芸舞妓の世界に関わっているわけ

ではない。しかし、そうは言ってもやはり祇園新橋は芸舞妓のまちでもある、ということである。社会の表立ったところに顔を出すことは少ないが、元芸舞妓の人が地域社会の要になっているともいわれている。そこで、今年度はこの両者の関係を探るために、まずは芸舞妓以外の生業に携わる人々にヒアリングを実施した。具体的には、呉服店や飲食店、酒屋である。

以上を踏まえて今年度の3人の方へのヒアリングで見えてきたのは、祇園新橋地区は3つの世界が重層しているということであった。その3つの世界とは、〈芸舞妓の世界〉、〈夜の飲食店の世界〉、〈生活店の世界〉である。〈芸舞妓の世界〉とはいわゆる花街のことで、西尾（2014）で詳細に描かれているように置屋や料亭などの芸舞妓をとりまく様々な産業の集合のことである。〈夜の飲食店の世界〉は、いわゆる居酒屋やバーやスナックなどの飲食店である。そして最後に〈生活店の世界〉とは、祇園新橋地区に住んで生活するために必要な店舗などの世界である。具体的には、美容室や喫茶店、衣料品店や酒屋・コンビニなどが含まれるだろう。

祇園新橋地区のヒアリングでしばしば耳にするのは、祇園新橋地区に出店している店舗は大きく分けると以上の3つであるということであった。地域住民は、花街のように一定のグループが形成されているものは〈芸舞妓の世界〉としてみなし、居酒屋やバーやスナックなどでも地域の祭礼行事には一切関わらなかったり、寄付だけして済ますといった店舗と、祇園新橋地区のなかに居住して町内会の役割を担ったり、祭礼行事に店主や店員が参加しているなど地域生活に深く関わっている店舗を分けて認識しているようである。したがって単に取り扱い品目や風営法の規制対象になるかどうかといった点で分類するものではない。そういったところから3つの世界に分類しているのである。

今回ヒアリングした住民はいずれも〈生活店の世界〉の住民であるが、彼女らによると、これら3つの世界は、互いにまったく交わらないという住民もいれば、一定の関わりがある、あるいは深く関わっていると述べる住民もいる。なかには〈芸舞妓の世界〉が実質的なリーダー層であるという見解もある。そして〈夜の飲食店の世界〉は基本的には地域に関わっていないという。ただし〈夜の飲食店の世界〉は元芸妓の店もあるので〈芸舞妓の世界〉と〈夜の飲食店の世界〉は無関係ではない。また〈夜の飲食店の世界〉も賃貸ビルの一 corner に店を構えていることが多く、地主やビルのオーナーが地元住民である場合も考えられる。このようにこれらの3つの世界がまったく関わりがないというわけではないが、詳しく明らかになっていない。

以上を踏まえて仮説的に述べると、おそらく実質的に祇園

新橋地区を支えているのは生活店の世界だと思われる。一般に「祇園」といえば〈芸舞妓の世界〉と〈夜の飲食店の世界〉が代表されるが、町内会の担い手やさまざまな地域団体、伝統的な祭礼行事の役割分担、行政組織との交渉など地域生活の様々な面で登場するのは〈生活店の世界〉の住民である。そのため地域自治という面では〈生活店の世界〉の住民が中心になっていると思われる。そして〈生活店の世界〉の住民による地域自治の将来は明るいものではない。現状では、祇園新橋地区に移住する人は皆無である。店舗兼住宅という居住形態がほとんど失われた現在、新たに店舗ができて住民が増えるわけではない。そのため町内会や各種団体の担い手は減っており、地域自治の担い手がなくなる寸前の状況にあるといっている良いだろう。もし地域自治の担い手である〈生活店の世界〉の住民がいなくなったとき、〈芸舞妓の世界〉と〈夜の飲食店の世界〉だけの地域社会がどのように変化していくのだろうか。

最後になるが、今回の事業実施にあたっては多くの方々にお世話になった。ヒアリングに応じていただいた方を始め、その家族の方々にもたくさんの心遣いをしていただいた。また地域連携研究センターのサポートなしに祇園新橋でヒアリングすることはできなかった。本プロジェクトを支えてくれた多くの方に心より御礼申し上げる。

文献リスト

- 船橋晴俊，2012、『社会学をいかに学ぶか』弘文堂
 岸政彦，2014、『街の人生』勁草書房
 西尾久美子，2014、『おもてなしの仕組み——京都花街に学ぶマネジメント』中央公論新社
 鯉坂学・小松秀雄，2008、『京都の「まち」の社会学』世界思想社
 岸政彦・石岡文昇・丸山里美，2016、『質的社会調査の方法——他者の合理性の理解社会学』有斐閣

「伝えたい記憶 写真に見る京都・馬町空襲被害地図」 成果報告

●連携先：修道自治連合会、馬町空襲を語り継ぐ会

文学部史学科 教授 坂口 満宏

1. 「馬町空襲被害地図」の作成経緯

1945年1月16日の夜11時20分ごろ、米軍のB29一機が京都に飛来し、京都市東山区の馬町周辺に250ポンド爆弾を20発投下、多くの民家と当時の京都幼稚園や京都女子専門学校が大きな被害を受けた。

こうした馬町空襲の歴史を風化させてはならないとして、2012年1月、修道自治連合会協賛のもと、「馬町空襲を語り継ぐ会」の母体が組織され、2014年1月16日、京都市立東山総合支援学校の敷地内に「空襲の地」と刻まれた石碑が建立された。そして2018年1月16日、石碑の前にて修道自治連合会・馬町空襲を語り継ぐ会主催による通算5回目となる「馬町空襲 献花追悼式典」が開催され、これが最後の式典となった。

この間に、京都女子大学文学部史学科日本史専攻の坂口ゼミでは、2017年度後期の演習において、地元の写真家が空襲直後に撮影した20枚余りの写真の分析を行い、撮影された現場を特定するとともに、地図に表示するという作業をおこなった。そうして出来上がったのが「伝えたい記憶 写真に見る京都・馬町空襲被害地図」である。

2018年1月16日には、前述の献花追悼式に引き続き、被害地図の作成にあたった学生が石碑の前に並び、パネルを用いて写真と地図について丁寧な説明をおこなった。地域の方々と学生による連携作業の成果が示されたということで、この取り組みは多くのマスコミにて取り上げられ、「馬町空襲被害地図」のことが多くの人に知ってもらえる機会となった。

増補改訂版 馬町空襲被害地図



以上のことから主として2017年度の取り組みの要約である。2018年度では、この取り組みに関心を持っていただいた方々からの依頼や要望に対して講演や執筆という形で応じていくとともに、「馬町空襲被害地図」に対してご指摘を受けた不十分な点を補うことで増補改訂版を作成し、京都内の市立高校、府立高校等に送付するという作業をおこなった。

以下、その取り組み事例を日付順に整理することで2018年度の成果報告とする。

2. 2018年度の取り組み

●2018年3月17日

立命館大学国際平和ミュージア主催(2017年度第8回)メディア資料研究会

テーマ「戦争体験のない世代が伝える戦争の記憶～京都の空襲に関わる二つの事例報告～」

空襲被害地図を作製した日本史演習のゼミ学生とともに参加し、地図作成の経緯を報告。

●2018年5月

京都教育センターからの依頼をうけて『季刊 ひろば・京都の教育』194号に「学生たちと作り上げた『伝えたい記憶 写真に見る京都・馬町空襲被害地図』」を寄稿。

●2018年5月27日

第516回 妙法院仏教文化講座にて「京都の馬町空襲一学生とともに調べたことなど」と題して講演。その記録は妙法院門跡『蓮華—仏教文化講座たより—』95号(2018年9月1日)に収録される。

●2018年8月22日～23日

京都市山科区四ノ宮の円光寺参道内で開催される「平和のための戦争展」実行委員会からの要請に応じて「馬町空襲被害地図」のパネルを貸し出す。

●2018年12月

2017度に作成した「馬町空襲被害地図」において記載できていなかった被弾地点2か所を追加し、「増補改訂版」を作成した。

追加箇所は①清水坂の沿道にある「通妙寺」付近、②東大路与馬町の交差点から二筋南に下がった「ホテル東山閣」の北側附近の2か所である。

●2018年12月22日

増補改訂版「馬町空襲被害地図」の送付作業

京都市内の高等学校へ送付

京都市立高等学校 4校、京都府立高等学校 17校
各50部送付

戦争と平和をテーマとする博物館へ送付

立命館大学国際平和ミュージアム、昭和館、しょうけい館
各100部送付

●2018年12月22日～2019年2月2日

本学A地下学生食堂の2か所(西側・南側の壁面)にてパネル展示



●2018年12月22日～2019年2月28日

図書館 1階 交流の床 ギャラリーウォールにてパネル展示



■次年度は、今年度の成果をふまえ、京都府下の公立・私立あわせて76校の高等学校に増補改訂版「馬町空襲被害地図」を送付する企画を考えている。

福祉施設の高い技術と、地域の特性を活かした商品共同開発および情報発信

●連携先：社会福祉法人 白百合会

生活デザイン研究所 非常勤研究員 宮原 佑貴子

1. 活動の背景と目的

京都市中京区の三条通に面してカフェと作業所を併設する社会福祉法人白百合会リ・ブラン京都中京では、障がいによって一般就労が困難な方が通所しオリジナルハンドメイド商品を製造している。商品製造に施す手刺繍や手織りなどの技術はどれもレベルが高く、品質の良い商品が生まれている。リ・ブラン京都中京は、古くから京染などの製造業がさかんで職住一体が多い立地にあり、地域の方がカフェを利用することも多く、交流の中から商品に対するアイデアや技術の提供などもあり、商品開発に取り入れられている。しかしその一方で、これらの商品は福祉支援の市場での販売が多く、一般市場で目にする機会が少ないために、クオリティの高い商品を広く発信することが困難な現状がある。本事業では、本学有志学生が主体となっておこなう、リ・ブラン京都中京の高い技術と地域性を活かした商品のデザイン提案、共同製作、大学や地域コミュニティでの販売、情報発信等の活動によって、商品の魅力を多くの人に発信することを目的としている。

2. 活動の形態

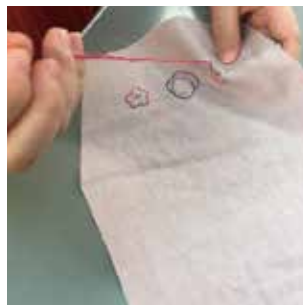
本学生活デザイン研究所「まごころプロジェクト」に所属する学生6名が中心となり、授業外の時間を活用して本事業に参加した。どの学生も、訪問可能な時間があればリ・ブラン京都中京の通常業務に加わり、職員や利用者の方々との交流のなかから作業に用いられる技術や特徴についての知識を得ることを基盤とした。共同製作商品のデザイン提案、製作、販売、取材、情報発信等については、学生メンバーそれぞれが役割分担をし、生活デザイン研究所やリ・ブラン京都中京において個別に作業を進める形で1年間の活動をおこなった。



3. 活動の内容

(1) 共同開発商品のデザイン提案・製作

地域の方が提供された家紋の図案を参考に、学生らと同世代の国内外女性観光客をターゲットに見据え、京都らしさと女性らしさを取り入れたオリジナルの紋デザインによる商品「はんなりもん」を提案した。デザインを効果的に表現する手刺繍のテクニックや配色、利用者の方々が参加しやすい作業工程について職員から助言を受けながら、学生が型紙等を準備し、リ・ブラン京都中京において刺繍を施し、学生が縫製とパッケージデザインをするバトンリレーによって商品が完成した。



(2) 共同商品の展示販売

11月2日～4日の3日間、本学S校舎エントランス前スペースにおいて、共同開発商品「はんなりもんポーチ」と「はんなりもんイヤリング」、リ・ブラン京都中京の商品であるクッキーや花ふきん、アロマキャンドル等の展示販売をおこなった。ポーチは3種類ある刺繍のデザインと、ひとつひとつ異なる模様の裏地が評判が良く20代～30代の女性が購入。イヤリングは、左右アシンメトリーにしたデザインと色合いが学生に人気があり、用意した数量は完売した。

12月9日、京都市西京区の竹の里団地でおこなわれた「竹の里団地フェスタ」に出展し、共同開発商品に加え、リ・ブラン京都西京（京都市西京区）のクッキー、花ふきん等の商品を販売した。ここでは、親子連れやお年寄りの方など、様々な世代の方とコミュニケーションを取りながら、近隣地域に事業所を置くり・ブラン京都西京の紹介をすることができた。

いずれの販売会も、売上は全て白百合会に納めることで事業への貢献をおこなうとともに、購入者とのやり取りから商品の反応を記録し、どの世代にどのような商品が注目されるのかについてなどのマーケティング調査をおこなった。



(3) 座談会の企画

日時:1月22日14:30~15:30

場所:社会福祉法人白百合会リ・ブラン京都中京(京都市中京区)

これまでの活動を通して、学生、職員、利用者がそれぞれに感じたことを語り合う座談会を企画した。社会福祉法人白百合会施設長、職員1名、利用者3名、京女生2名、非常勤研究員の計8名が参加した。座談会に先駆けて利用者全員にアンケートを実施し、京都女子大学の学生との活動や共同商品についてどう感じているかなどの項目に答えてもらった。その結果から、学生たちが作業室に来ることが嬉しい、商品は可愛い等の回答が多く、好印象を持って迎えてくれていることが分かった。座談会では、学生からは「障がい者の方々への就労支援の事業所というものをこのプロジェクトを通じて初めて知ったことが一番の変化だった。自身がデザインした商品が売れ、売上げをお渡しできたときは嬉しかった。」利用者からは「自分が刺した刺繍の商品を販売会で売れているのを見たときは嬉しかった」、「自分でしっかり綺麗に気を付けて刺しゅうをした」など、活動をふりかえって和やかに語り合った。

4. 今後の課題と目標

本事業に参加した学生らは、生活デザイン研究所において、2017年度(1名は2016年度)からリ・ブラン京都中京との活動をおこなっているメンバーらで、すでにリ・ブラン京都中京の方々との面識があったことから、今年度の活動では、互いの関係をさらに深く育みながら事業の発展を目指してきた。前年度の経験をもとにデザイン提案や製作、販売をおこなうことによって商品企画と製造のプロセスを知り実践することができた。また、福祉施設の魅力的な商品を多くの人に広めたいという思いを強く持ち、自身が主体的に考え行動したことによって、福祉施設への貢献につながることを実感したように思う。しかし、学生らは、授業外の時間を使って活動しているため、リ・ブラン京都中京の利用者の方々の勤務時間内(9:30~16:00)での訪問時間が思うように取れず、特に商品共同製作においては大学での学生による作業と、事業所での利用者による作業と離れて進める分担作業が多くなった。また、随時発生する商品仕様の相談等について、学生と職員が細やかなやり取りをおこなう方法についても課題が残る。試行的な取り組みのなか学生らの思いを汲み製作活動を支えてくださった施設の職員、利用者の方々をはじめ関係者の皆様に心より御礼を申し上げる。

今後は、円滑な連絡方法とコミュニケーションを大切にしながら、学生らが主体となって福祉施設、地域とのつながりを作り出す本活動のさらなる発展を目指し継続していきたい。



第2回KWU小学生プログラミングコンテスト

●連携先：京都市内の小学校、京都女子大学附属小学校

現代社会学部現代社会学科 講師 丸野 由希

1. 実施の背景と目的

現代社会学科の学生は1回生からプログラミングを学んでいる。現代社会学科丸野ゼミの学生たちはプログラミング学習経験を活かして、これまでに高校生向けプログラミング体験イベント「Ruby Girls」を企画・運営してきた。2020年からの小学校におけるプログラミング教育必修化を受けて、小学生や保護者にプログラミングの楽しさを知ってもらうことを目的に、昨年度に第1回KWU小学生プログラミングコンテストおよび京女プログラミング教室を実施し、参加者から好評を得た。本年度は京女プログラミング教室および第2回KWU小学生プログラミングコンテストを実施した。

2. 活動内容

2-1 京女プログラミング教室①

日時：2018年7月10日（火）

場所：京都女子大学5校舎

対象：京都女子大学附属小学校4年生

京都女子大学附属小学校4年生全員を対象に、小学校の授業の一環として実施した（図1）。プログラミング言語は、ビジュアルプログラミング言語であるScratchを使用した。Scratchは、ブロックを組み合わせることでプログラムを書くことができるプログラミング言語で、直感的にプログラミングを行うことができる。教材は、大学でプログラミングを学んでいる情報系ゼミの4回生が作成した（図2）。「かけっこゲーム」の作成を通して、プログラミングに必要な考え方を楽しみながら学べるように工夫されている。



図1 プログラミング教室の様子

2-2 京女プログラミング教室②

日時：2018年12月22日（火）13:30～16:30

場所：京都女子大学5校舎

対象：京都市内の小学1年生～6年生

京都市内の小学校に通う児童を対象に、プログラミング教室を実施した。51名の応募があり、1・2年生クラスと3～6年生クラスの2クラスに分けて実施した。なお、10歳以下は保護者同伴とした。

プログラミング教室の前半はオリジナル教材に沿って進め、後半はプログラミングコンテスト応募に向けたオリジナル作品の作成を行った。1クラスあたり大学生4名と教員1名が指導にあたった。教室終了時に、参加者に修了証書（図3）を授与した。

2-3 第2回KWU小学生プログラミングコンテスト

対象：京都市内の小学校に通う1～6年生

応募作品：Scratchで作成した未発表のオリジナル作品

【公開審査】

日時：平成31年2月2日（土）13:30～16:30

会場：京都女子大学 図書館交流の床 1階ホール

公開審査では、書類審査を通過した5名が各10分間のプレゼンテーションを行った。プレゼンテーションでは、実際に作品を操作する様子をスクリーンに映しながら、作品のストーリーや工夫した点、難しかった点などの発表した（図4）。

3. 企画・運営に携わった学生の感想

プログラミング教室は、子どもにプログラミングの楽しさを伝えるための工夫が必要だと感じた。特に、問題解決のために自分でブロックの組み立て方を見つけることに楽しさを感じて欲しいと考えたので、子どもたちが操作を覚えてきたあとはすぐに次の手順を教えるのではなく、「こういう動きをするためには次に何のブロックがあると思う?」といった質問をするように心がけていた。

コンテストではプログラミング教室で学んだことを応用させながら、オリジナルのキャラクタやゲームを開発していて、その柔軟な発想に驚いた。工夫を凝らした発表を聞くことができ、このコンテストの運営に関わることができて良かったと感じた。

4. まとめ

本事業を通して、小学生や保護者にプログラミングについて知ってもらえただけでなく、学生にとっても大学で学んでいるプログラミングの学びを深める機会となった。

今後も継続して京女プログラミング教室およびプログラミングコンテストを行っていきたい。



図4 児童によるプレゼンテーションの様子

1. メイン画面を作ろう！

まずはネコをキーボードの矢印で動かせるようにしましょう。
背景を「2」にして画面の左下のネコが青いわくでかこまれているか確かめたら、

ブロックを右みたいに組み合わせてみよう。
こうするとキーボードの右向き矢印キーでネコが動かせるようになるよ。

ただ、これだとゴール地点がわからないよね。
だから、この下に「もし〜なら」というブロックを付け足すよ。

こうすることで「ネコがx座標「200」の地点をこえた時点でドラムが鳴る」ようになるよ。ドラムの音が聞こえたらゴールってことだね。

それからもう1つ、

このブロックの組み合わせを作っておこう。こうすることで、ネコをおすとネコがスタート地点まで戻ってくれるようになるよ。

13

図2 学生が作成した教材

修了証書

殿

あなたは京女プログラミング教室の課程を修了し、プログラミングの知識を深めたことをここに証します
これからも面白い作品をたくさん作ってください

平成30年12月22日

京都女子大学
地域連携研究センター

図3 修了証書

京女まち歩きオープンデータソン:2年目の取り組み

●関係先: 京都市東山図書館 京都府立図書館 オープンデータ

図書館司書課程 講師 桂 まに子

1. プロジェクトの目的

図書館司書の資格取得のための科目を持つ図書館司書課程では、「新しい図書館に対する展望を持ち、現状を積極的に改革できる人材」の養成に力を入れている。本学図書館司書課程を履修する学生が地域の図書館に就職することを想定し、当該地域に根差したサービスに従事する上で必要となる地域社会との関わり方や、地域の情報を収集・整理して正確に発信する技術力など、図書館員として即戦力となるスキルを身につけることが本プロジェクトの目的である。

そして、本プロジェクトの成果が地域に還元され、卒業後もウェブ上でどこからでも見られる仕組みをつくること（オープンデータ化）も目的の1つである。前年度は東山のローカルな名所や名物について調べ、まち歩きをしてWikipediaの記事やOpenStreetMapの地図を編集し、ウェブ上で発信することに力を入れた。2年目となる今年度は、ローカル情報の発掘と情報発信を継続しつつ、蓄積されていく東山の情報を外部に見える形にしていこうという考えが込められている。具体的には、(1)本プロジェクトの成果を冊子で記録し、学内外で配布する、(2)冊子を京都市図書館へ寄贈し、東山の「いま」を知ることのできる地域資料とする、という2つの手法を実践した。

2. プロジェクト概要

2.1 オープンデータソンとは

オープンデータソンとは、「オープンデータ」と「マラソン」を組み合わせた造語である。本学の学生が歴史と文化資源あふれる京都・東山について関心を持ち、自ら調べ、まちを歩き、地域の情報をWikipediaとOpenStreetMap (OSM)を用いてオープンデータ化して継続的に実践していきたいという思いを込め、「オープンデータソン」という用語をプロジェクト名に用いた。今年度実際に取り組んだのはWikipediaの編集である。対象地域となった「祇園界隈」のOSMは既に編集されていたため、冊子制作の段階で地図を二次活用した。もう1つの対象地域「京都女子大学周辺」の地図は、学生チームが独自に作成したため、それをデジタル化して冊子に掲載した。

2.2 事前学習

今年度は、平成30年10月～平成31年2月にかけての半期プロジェクトとして実施した。学期中を事前学習期間とし、東山区内でオープンデータ化したいエリアの選定と現地調査、ローカル情報の収集、図書館での文献調査を行った。参加学生は、次年度に図書館実習を検討中の10名で、京都女

子大学周辺（馬町～大和大路）と祇園界隈（祇園会館～安井金比羅宮）の2チームに分かれた。

事前学習はまず、京都市東山図書館が作成する「京ひがしやま文学散歩」に掲載中の148作品から、2つのエリアが登場する文学作品を選ぶことから始めた。読了後は、作品の舞台となった現地を実際に訪れ、東山の「いま」に関する情報を収集した。学生たちが読んだ東山登場作品は、『あした、出会った少年：花明かりの街で』（越水利江子作、石井勉絵、2004）『壺霊』（内田康夫、2008）『古都』（川端康成、1968）『京羽二重』（谷崎潤一郎、1982）『太陽の塔』（森見登美彦、2003）『ここは京まち、不思議まち』（服部千春、2010）など。安井金比羅宮や八坂神社、祇園会館など、祇園界隈を舞台にした小説は今なお創作されている。

2.3 冊子制作

プロジェクトに参加した学生が一番力を入れたのが、東山の「いま」を知るための冊子制作である。京都女子大学の在学生やこれから入学する新入生に向けて、自分たちの身近な地域となる東山を知るきっかけとなるような情報を伝えられることを目指し、収集した情報を元にページ編集を分担した。ここでは完成した冊子の中身をエリア別に一部紹介する。

エリア1:「京女生も知らない世界」by かえるゼミ



エリア2:「祇園から見る歴史と文化」by チーム祇園



2.4 Wikipediaにて新規記事の執筆

学期中に事前学習および冊子制作を済ませ、学期末(2019年2月7日)に大学周辺のまち歩き兼Wikipedia編集を集中して行った。今回のターゲットは、大学に近い神社であるのに行く機会がなかなかなく、ウェブ上に公式HPもないため情報が少ないローカルな神社「三嶋神社」である。今であればたいのことはWikipediaに載っていそうなものなのにと学生たちは最初驚いていたが、このようなローカルな情報こそ、一番身近な我々学生たちが自発的に発信しなくてはウェブ上に蓄積されないことに気づき、在学中に経験することの意義を感じ取ってくれた。新規記事執筆に必要な情報を入手するために現地を訪れ、神社の外観と「揺向石」の写真を撮り、神社について書かれた「由緒略記」を持ち帰った。

大学に戻り、PC教室でWikipediaの記事編集を分担して行った。画像編集の担当は、撮影した神社の「境内正面」「揺向石」の写真をWikimedia Commonsにアップロードし、クリエイティブ・コモンズ・ライセンスを選択した。これは撮影者自身が二次利用(再利用)を許可する意思表示ができる、著作物共有の新しい考え方である。テキスト編集の担当は、事前調査でまとめていた文章とまち歩きで入手した神社の「由緒略記」を参考にして説明文を作成した。Wikipedia編集は全員初めてであったが、既存の神社記事のテンプレートを参照しながら下書きを作成し、プレビューで確認しては手直しをしていく作業を繰り返した。新規記事に掲載した内容は、「祭神」「歴史」「境内」「境内社」「現地情報」「参考文献」「脚注」「関連項目」となった。下書き記事にWikimedia Commonsの画像2点のアドレスを追加し、画面上に写真を反映させれば、記事は完成間近である。

学生たちが一番苦戦したのは、新規記事名である。そもそもWikipediaには「三島神社」という既存の記事があり、ここには全国の三島(三嶋)神社の一覧が紹介されている。京都東山にある「三嶋神社」と同名の神社は他の地域にもあるため、それらと混乱しないような名称が良いと学生たちで話し合い、新規記事名を「三嶋神社(京都市)」とした。最後に、前出のWikipedia記事「三島神社」内の神社一覧の当該神社名と新規記事「三嶋神社(京都市)」とをリンクさせた。



3. プロジェクトの成果と今後の展望

昨年度の成果はウェブ上に残るデジタル情報が中心であったが、今年度は、新たに冊子制作に取り組み、アナログとデジタルの両方のやり方でローカル情報を蓄積することに挑戦した。アナログな冊子のタイトルは『ものしり歩きのひがしやま:京女生×地域×観光』に決まり、「ものしりカエルくん」というまち案内役のキャラクターが生まれた。この存在は大きく、京女生によるローカル情報のオープンデータ化をより分かりやすく伝えていくメンバーの1員として、今後のプロジェクトの中でも登場させたいと考えている。

デジタルなローカル情報の蓄積と発信の詳細は、Wikipediaの「三嶋神社(京都市)」を参照してほしい。記事の「履歴表示」を見ると、新規公開は「2019-02-07 16:54:58」と記録されている。その後、「2019-02-16 00:49:44」に別の人物によって記事編集が加えられた形跡が見られる。オリジナル記事との違いを比較したところ、体裁が整えられ、ウェブ上の関連情報が脚注に加わり、記事の最後に「京都市の神社」「東山区の建築物」「東山区の歴史」へのカテゴリリンクが貼られていた。このように、一度オープンデータ化されたローカル情報は、他者によっても編集が可能となる。ウェブ上にデジタルなローカル情報の種を蒔き、学内外問わず、誰もが情報にアクセスでき、編集し合える場をこれからも作り出していきたい。

今年度含めることのできなかったOpenStreetMap(OSM)による地図編集もローカル情報の蓄積に繋がる。大学周辺の地図のオープンデータ化を完了させる。そして、仕上げた地図をどのように二次活用すれば付加価値をつけたローカル情報となるか学生たちにアイデアを出してもらい、実用的なツールづくりを目指す。



京都女子大学親子支援ひろば「ぴっぱらんど」

●連携先：市内保健センター 児童館など

発達教育学部児童学科 准教授 瀬々倉 玉奈

1. 児童学科の親子支援ひろば「ぴっぱらんど」

昨今の子こどもと保護者がおかれている厳しい状況と、大学による地域貢献、保育者に新たに求められている保護者支援の必要性から、2016年度より児童学科では、親子支援ひろば「ぴっぱらんど」の活動をスタートした。子育て支援ルーム内外の整備から学生と教職員が協力し合いながら実施してきたそのプロセスは、本紙2017年度報告書に詳しい(瀬々倉,2018)。

「ぴっぱらんど」のコンセプトは、以下のとおりである。

- ①未就園児とその保護者とを対象の中心にする。
- ②家庭ではなかなか経験できない豊かな遊び体験を提供する。
- ③子どものみならず、保護者にとっても意味のある体験を提供する。
- ④豊かな親子関係をつむぐことに貢献する。

2018年度は、このコンセプトの下に、「ぴっぱらんど」と「ぴっぱらんどシリーズ」とで内容が大きく異なる2つの形態によって親子支援活動を実施した(表1)。

表1. 2018年度 京都女子大学親子支援ひろば「ぴっぱらんど活動」2形態の比較

	親子支援ひろば	ぴっぱらんど
	ぴっぱらんど	ぴっぱらんどシリーズ
実施形式の特徴	広く親子に開放	親子分離が原則
参加者	未就園児を中心とした不特定多数の親子	1歳6ヶ月～2歳児の親子6組
申込み	不要	申し込み制
頻度	年に8回(半日)	4回(週に一度)
内容	ノン・プログラム	プログラムあり
スタッフのかかり方	見守り	子ども1人に担当者1人+保護者担当複数人
学生の主な学び	広く親子にかわり、発達段階の特徴などを理解し、その対応に慣れる	親子に密に関わり、連続性の中で変化の過程によりそう
スタッフの専門分野	多様	乳幼児精神保健学ゼミ生、院生、幼稚園教諭・保育士、臨床心理士

本事業は、「ぴっぱらんど」の実施に関わるものである(図1)。

「ぴっぱらんど」は、オープンキャンパス開催日の土日や、毎年、児童学科の3回生が中心となって学園祭期間中に行っている「こどもひろば」の開催日(祝日)に6日間開催した。基本は午前中のみで開催としたが、こどもひろば開催日には終日とし、複数の3回生のゼミ生と教員が携わった。さらに、スタッフとして参加を希望した1、2回生も加わった。

表1のように、「ぴっぱらんどシリーズ」は1つのゼミの3、4回生が中心になり連続して行っているのに対して、「ぴっぱらんど」の場合は毎回、半日毎に8つの異なる教員とゼミ生た



図1.ぴっぱらんどのチラシ

ちが担当したため、室内外のセッティングや受付、実施方法などについて、情報を共有することが課題となった。例えば、男性の保護者の利用も想定して、オムツ替えコーナーや授乳コーナーを男女別々に用意するなど、開催日や利用者の特徴に留意した。学科内の4つの領域から選出された「ぴっぱらんどワーキング・グループ」で話し合い、学科で検討を重ねて情報を共有していった過程については別稿に譲る(瀬々倉,2019)。

2. 「ぴっぱらんど」利用者へのアンケート結果

(1)ぴっぱらんどの利用者

利用者から回収したアンケート数、49人分から算出された利用者数は、6日間で約160人にのぼった。回答を得られなかった利用者もいたり、こどもひろば開催日の2日間については、終日、他の会場と行ったり来たりしながら安全基地のように活用していた利用者も多かったりしたことから、延べ人数としてはこれを大きく上回ると考えられる。

「ぴっぱらんどシリーズ」は平日に行い、こどもと母親のみが参加者であったのに対して、「ぴっぱらんど」は、対象年齢の子どもだけでなく、きょうだい、父母、祖父母など家族ぐるみでの利用が多かったことが特徴である。また、利用者160人の内の85人が子どもであり、年齢は、生後6ヶ月から4歳9ヶ月と幅広かった。

利用者のうち、保護者の内訳は以下である。

両親：26組

母親：47人、内、単独は21人(44.7%)

父親：28人、内、単独は：2人(7.1%)

利用回数については、「ぴっぱらんシリーズ」が連続4回の講座であるのに対して、「ぴっぱらんど」は基本的に単発の利用を想定しており、1回限りの利用者が75.0%の42人であった。また、11月の連休に開催された「こどもひろば」に参加した際の利用が多かった。一方で、中には4回来場の利用者もあった。

また、「ぴっぱらんど」をどこでしましたかの問いに対して、大学のホームページが9人、区役所・児童館がそれぞれ5人、こどもみらい館・ぴっぱらんシリーズ参加者がそれぞれ3人、友だちが2人、ぴっぱらんのツイッターは0で合計22名である。このことから、利用者の半数以上は、「こどもひろば」に参加して様子を知ってから、「ぴっぱらんど」を利用したと推測できる。

(2)「ぴっぱらんど」を利用した理由

「ぴっぱらんど」を利用した理由を3件法で訊いたところ、「子どもに良い体験をさせてあげたいから」に該当すると回答した者が73.2%と最も多く、次いで、「家には無い空間や玩具があるから」に該当すると答えた者が69.6%と多かった(図2・3)。

また、「子どものお友達を作りたいから」に該当する者は12.5%に対して、該当しないとされた者が33.9%であった。

さらに、「親同士の交流をしたいから」については、非該当が42.9%であり、該当者はわずか7.1%であった。まずは、子どもへの良い影響を求めて利用したことが理解できる。

「ずっと家にいるとストレスがたまるから」の該当者は32.1%であるが、ストレスがたまるのは、子どもなのか保護者なのか、それとも両者なのかは不明である。

(3)今後参加したい活動

今後、参加したい活動については、今回の「ぴっぱらんど」に参加したいと回答した利用者は、69.6%であった(図4)。

その他の参加希望の内容として、既に行っている「親子分離を基本とする「ぴっぱらんシリーズ」や未実施の「愛着理論に添った保護者支援である安心感の輪プログラム+子ども向けの企画」については参加したいとした者が共に46.4%、「保護者への講演と託児」は42.9%であり、「ぴっぱらんど」の利用者は、家族ぐるみの参加が多いことから、家族みんなで楽しめる内容を希望していることが理解できた。

この結果は、「ぴっぱらんシリーズ」の参加理由の1つとして、「親子分離が魅力的だから」とする参加者が多いことから考えると、2つの異なる形態の親子支援を展開していくことには意味があると考えられる。

最後にスタッフの対応について尋ねたところ、89.3%が「良い」と回答しており、これまでの学びが活かされているのではないかと推察された。

3. 今後に向けて

試行錯誤の中で「ぴっぱらんど」を開催し、多くの家族ぐるみの利用者に恵まれた。しかしながら、利用者の多くは、特定の日程に限られていた。今後は、実施回数や開催日、担当ゼミの見直しを検討し、京都女子大学児童学科ならではの新たな内容を検討したい。

文献

瀬々倉玉奈 (2018) 乳幼児期の子ども・子育て支援実践と支援者養成—京都女子大学親子支援ひろばぴっぱらんど—。京都女子大学地域連携研究センター Annual Report2017. P.17-19

瀬々倉玉奈 (2019) 保育者養成課程における子ども・子育て支援に 関する枠組みの構築—京都女子大学親子支援ひろば「ぴっぱらんど」の実施準備—。京都女子大学教職支援センター研究 紀要創刊号。発刊予定

こどもに良い体験をさせてあげたいから

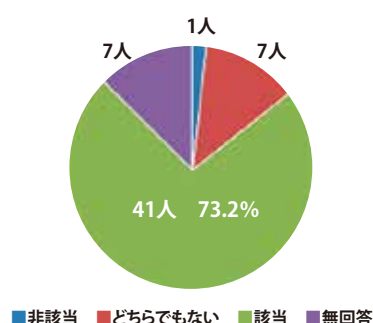


図2.参加の理由①

家にはない空間や玩具があるから

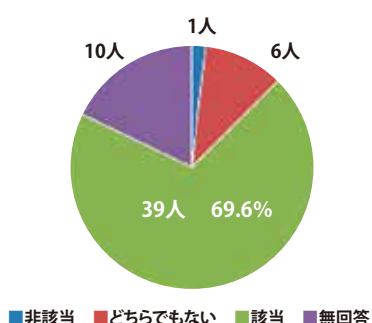


図3.参加の理由②

ぴっぱらんど(親子の自由遊び)

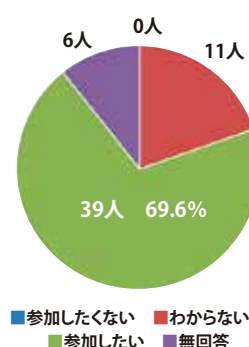


図4.参加したい活動

第3回京女ラウンドテーブル会議

「京女ラウンドテーブル」とは、包括協定先と大学の間の情報交換に加え、通常では接点を持つ機会の少ない包括協定先諸機関同士のネットワークづくりに何らかの役割を果たすことが出来ないかとの意図で平成28年度より組織された協議機関である。今年度、3回目を迎える会議には、自治体、企業、NPO法人など、15機関から21名のご参加をいただいた。

今回は「寄附講義で大学に期待すること・取り組みたいこと」「京都女子大学との連携活動に期待すること」について、関係機関との意見交換がなされた。

寄附講義の担当企業からは、本学学生の授業態度が熱心であると評価いただいた。また、授業評価をどのように行うかの基準が難しいという質問があり、出席回数やレポートの評価基準などについて、意見交換がなされた。他企業の寄附講義についての工夫を知ることができ参考になったと当会議の開催を評価する声や、他企業の寄附講義を聴講する機会が欲しいとの意見が聞かれた。

連携活動に関しては、広範囲に行われていることを評価いただいた。学生の意見を取り入れた商品開発を行いたい、学生のインターンシップの受け入れを継続して行いたいなど、学生を交えた活動に期待する意見を多くいただいた。

寄附講義を担当している企業や学生と連携活動を実施している企業同士が、コミュニケーション出来る機会は有意義であり、継続を望む声が聞かれた。

プログラム概要

○開催日時：平成31年2月15日(金)13時～14時

○開催場所：京都女子大学

図書館交流の床2Fカフェ前スペース

○次第：

1.開会挨拶 京都女子大学 林 忠行

2.意見交換 司会：地域連携研究センター長 竹安 栄子

○参加企業・官公庁・団体

阪急電鉄株式会社

株式会社 京都銀行

株式会社 朝日新聞社

大阪ガス株式会社

招徳酒造株式会社

株式会社 三井住友銀行

NPO法人京都景観フォーラム

ハイアットリージェンシー京都

ムーンバット株式会社

東山区役所

東山消防署

京都刑務所

京都市立東山総合支援学校

京都府警察本部

東山警察署

合計15機関(順不同)/ 合計21名参加



学まち推進型補助事業 成果報告会

本年度は、学内の他の補助事業と合同で、成果報告会を行った。報告は、発表とポスターセッションという2つの形式で行われた。学内だけでなく、連携先企業、地域からも多くの出席者があり、盛会となった。「充実した取り組みを知り、感銘を受けた。」「プロジェクトの発表、ポスターの発表、どちらも洗練されていた。」など評価をいただいた。

開催日：平成31年2月15日(金)

成果報告会の概要

■ポスター発表：図書館交流の床 1Fホール & 2Fカフェ前スペース 10:00～16:00

- 京都の伝統染織産業と人の輪をつなぐネットワーク
青木 美保子(生活造形学科)准教授
- 音楽による地域貢献プロジェクト 音楽ふれあい隊
田中 純(教育学学科音楽教育学専攻)教授
- 福祉施設の高い技術と地域の特性を活かした商品共同開発および情報発信
宮原 佑貴子(生活デザイン研究所)非常勤研究員
- KWU小学生プログラミングコンテスト
丸野 由希(現代社会学科)講師・丸野ゼミ学生
- 京女まち歩きオープンデータソン
桂 まに子(図書館司書課程)講師
- 京都女子大学親子支援ひろば「ぴっばらんど」
瀬々倉 玉奈(児童学科)准教授

■成果発表：図書館交流の床 1Fホール 14:00～16:00

- ①京都刑務所「矯正展」における造形ワークショップ“ワクワク木育キャラバン”
矢野 真(児童学科)教授
- ②「祇園祭小型鉾」修復プロジェクト
前崎 信也(生活造形学科)准教授
- ③東山区における自主防災活動と町内会運営の実態に関する実証的研究
奥井 亜紗子(現代社会学科)准教授
- ④「祇園新橋に生きる女性たち」聞き書きプロジェクト
森久 聡(現代社会学科)准教授
- ⑤増補改訂版「写真に見る京都・馬町空襲被害地図」
坂口 満宏(史学科)教授
- ⑥京女まち歩きオープンデータソン
桂 まに子(図書館司書課程)講師
- ⑦京都女子大学親子支援ひろば「ぴっばらんど」
瀬々倉 玉奈(児童学科)准教授

(※職名は報告会当時)



京都女子大学 Women's University 学内公募型事業 成果報告会プログラム

開催日時 2019年2月15日(金)

11:00～12:00 主に学生主体のプロジェクトの成果報告
14:00～16:00 主に教員による発表、産学連携プロジェクト等の成果報告
※10:00～16:00の間、ポスター展示、成果物等を自由にご覧いただけます。

開催場所

京都女子大学 図書館交流の床 1Fホール&2Fカフェ前スペース

成果報告会

11:00～12:00

主に学生主体のプロジェクトの成果報告：
2Fカフェ前スペース

《らしつよチャレンジ》

- ①環境に配慮した衣類アップサイクル・繊維リサイクルの啓発活動とデザイン提案 / 岡田 希花(現代社会学科2年生)、成実 弘至(生活造形学科)教授
- ②法學部ピアサポート・プログラム / 森 ちひろ(法学科3年生)
- ③ライブラリーカフェ Sora を活用した交流イベント(ワークショップ)の開催 / 吉富 恵(生活造形学科3年生)
- ④学生自導で今熊野小学校路を活性化～元 Sora からの提案～ / 中川 あかり(教育学科4年生)

《学長採択型課題解決プロジェクト》

- ⑤留学生サポートリーダー育成プログラム / 劉 小俊(国際交流センター長)

14:00～16:00

主に教員による発表、
産学連携プロジェクト
等の成果報告：
1Fホール

《学まち推進事業》

- ①京都府刑務所「矯正展」における造形ワークショップ“ワクワク木育キャラバン” / 矢野 真(児童学科)教授
- ②「祇園祭ミニチュア鉾」修復プロジェクト / 前崎 信也(生活造形学科)准教授
- ③東山区における自主防災活動と町内会運営の実態に関する実証的研究 / 奥井 亜紗子(現代社会学科)准教授
- ④「祇園新橋に生きる女性たち」聞き書きプロジェクト / 森久 聡(現代社会学科)准教授
- ⑤増補改訂版「写真に見る京都・馬町空襲被害地図」 / 坂口 満宏(史学科)教授
- ⑥京女まち歩きオープンデータソン / 桂 まに子(図書館司書課程)講師
- ⑦京都女子大学親子支援ひろば「ぴっばらんど」 / 瀬々倉 玉奈(児童学科)准教授

《らしつよチャレンジ》

- ⑧京女B5の会 発起にチャレンジ～らしつよを社会参加～ / 福島 優美、山下 珠夢(法学科4年生)

《学長採択型 課題解決プロジェクト》

- ⑨京都の国際化に対して京都女子大学が果たすべき役割の再検討 / 前崎 信也(生活造形学科)准教授
- ⑩建築文化遺産の保存活用デザイン手法に関わる実習用模型の開発 / 北尾 晴雅(生活造形学科)教授
- ⑪教育学専攻・児童学科と京都幼稚園との教育研究連携 / 表 真美(教育学科)教授

(順もご覧ください)

10:00～16:00

ポスター発表：
図書館交流の床
1Fホール &
2Fカフェ前スペース

《学まち推進事業》

- ①京都の伝統染織産業と人の輪をつなぐネットワーク / 青木 美保子(生活造形学科)教授
- ②音楽による地域貢献プロジェクト 音楽ふれあい隊 / 田中 純(音楽教育学専攻)教授
- ③福祉施設の高い技術と地域の特性を活かした商品共同開発および情報発信 / 宮原 佑貴子(生活デザイン研究所)非常勤研究員
- ④KWU小学生プログラミングコンテスト / 丸野 由希(現代社会学科)講師・丸野ゼミ学生
- ⑤京女まち歩きオープンデータソン / 桂 まに子(図書館司書課程)講師
- ⑥京都女子大学親子支援ひろば「ぴっばらんど」 / 瀬々倉 玉奈(児童学科)准教授

《らしつよチャレンジ》

- ⑦手紙の学習交流会 / 北澤 奈美(国文学科2年生)
- ⑧卒業生・在校生 交流グループ展 / 渡邊 敬子(生活造形学科)准教授
- ⑨プロジェクションマッピング / 北野 奈々(生活造形学科3年生)
- ⑩京女・らしつよファッションショー in 京博 / アパレル企画制作部 twinkle

《学長採択型課題解決プロジェクト》

- ⑪高齢者支援のための空き家活用プロジェクト / 井上 エリチ(生活造形学科)准教授
- ⑫建築文化遺産の保存活用デザイン手法に関わる実習用模型の開発 / 北尾 晴雅(生活造形学科)教授
- ⑬プログラミング的思考による知識活用型授業の開発 / 坂井 真司(教育学科)准教授
- ⑭情報リテラシー能力の向上のための図書館情報学ワークショップ / 坂本 俊(図書館司書課程)助教

《その他連携活動等》

- ⑮学まち推進型連携活動補助事業 2018「地域とともに、まちづくり活動」に報告
- ⑯地域女性リーダー養成プログラム「連携活動入門」連携活動始め～連携活動にチャレンジ～
- ⑰地域女性リーダー養成プログラム「地域連携講座 B1：地方自治体の取り組みを学ぶ」
- ⑱地域女性リーダー養成プログラム「地域連携講座 B2：京都の社会と連携活動」
- ⑲「地域女性リーダープログラム(副専攻)」の構築
- ⑳平成30年度「京都女子大学 未来をひらく リカレント教育課程～働くための学びの場～」に報告

学まち推進型補助事業成果報告会会場

・ポスター発表

ポスターを熱心に、多くの方からご覧いただいた。
発表の終了後には、来場者からの質問にも対応した。

・成果発表

研究ごとに15分程度の時間で発表を行った。来場者から京都女子大学での取り組みが多様であり、充実していることを実感できたとの感想があった。



女子大学連携ネットワーク

国際女性デーシンポジウム

「女子大学の現在、そして未来へ」

女子大学の現状や未来について考えるシンポジウムが国際女性デーにちなんで下記の通り開催され、市民や企業・行政関係者約80名が参加した。シンポジウムでは、本学の林学長をはじめとする京都の女子大学の学長3名が、学生の教育や教職員のキャリア形成上の課題について意見を交換した。林学長からは女性の管理職や学長を増やし、女子学生のロールモデルを育てる必要性を指摘した。また、離職した女性の学び直しを推進するリカレント教育の在り方について触れられていた。

日時:平成31年3月7日(木) 13:00～17:00

場所:京都光華女子大学

第Ⅰ部 女子大学の未来、三学長と共に

13:05～13:35 講演「女性の教育と持続可能な開発目標(SDGs)」

池上 清子(公益財団法人プラン・インターナショナル・ジャパン理事長)

13:35～14:00 三学長講演

「三学長、女子大学の未来を語る」

京都光華女子大学・京都光華女子大学
短期大学部 学長

一郷 正道

京都女子大学 学長
林 忠行

同志社女子大学 学長
加賀 裕郎

(五十音順)

14:00～14:40 パネルディスカッション

パネリスト 三学長

モデレーター 池上 清子

第II部 女子大学の現状と課題

- 15:00～15:40 女子大学におけるリカレント教育
日本女子大学 教授
坂本 清恵
京都女子大学 地域連携研究センター長
竹安 栄子
- 15:40～16:00 女子大学におけるキャリア教育
同志社女子大学
女性アクティベーションセンター
京都光華女子大学
女性キャリア開発研究センター
- 16:00～16:20 全体討論
- 16:30～17:00 懇親会



2018年度 大学・地域連携サミット

2018年度 大学・地域連携サミットに「学まち連携大学」促進事業採択校として出席し、基調講演への参加のほか、事業の中間報告とポスターセッションを行った。

第一部の基調講演は、山崎満広氏(元米国ポートランド市開発局国際事業開発オフィサー、つくば市まちづくりアドバイザー)より、ポートランドのコミュニティデザインについて、実際に「コンパクト・シティ」の環境デザインやソフトづくり、コミュニティの活性化の仕掛けづくりに携わった経験をお話いただいた。また、講演後に大学コンソーシアム京都、京都市の職員を交えたセッションもあり、講演内容の掘り下げとなる充実した内容だった。

その後、各大学による学まち連携大学促進事業のプレゼンテーションが5分ずつ行われ、各大学とも独自性のある取り組みを披露した。本学からは、竹安栄子地域連携研究センター長が、本学の地域連携の取組と副専攻である「女性地域リーダー養成プログラム」について報告を行った。

第二部においては、各大学の取組をまとめたポスターセッションが行われ、一般の来場者から「京都女子大学の活躍にますます期待します」とのメッセージメモをいただき、大いに励まされた。



生涯学習機会提供の拡充

履修証明プログラム

平成27年度より、本学の授業科目とプログラム独自の講習を組み合わせることで履修することによって、体系的な知識や技能の習得を図り、その成果として学校教育法第105条の規定にもとづく履修証明書を交付する履修証明プログラムを開設している。

平成30年度は「京都案内マイスター養成プログラム（京都英語案内マイスター養成・初級コース、京都日本語案内マイスター養成・初級コース、京都マイスター養成・初級コー

ス）」と「仏教プログラム」「中国文化と言語プログラム」「京都の歴史と文学プログラム」の4講座を開講し、平成30年度履修者として「京都英語案内マイスター養成・初級コース」に1名、「京都日本語案内マイスター養成・初級コース」に1名、「仏教プログラム」に1名、「中国文化と言語プログラム」に2名、「京都の歴史と文学プログラム」に3名の申し込みがあり、応募資格を満たした8名とも履修を許可し、プログラム修了要件を満たした8名に履修証明書を交付した。

平成 30 年度 生涯学習講座一覧

講座名	開催月	所属・身分	講義担当者
経営学入門～組織・会計・マーケティングの基本を学ぶ～	5月・6月・7月	現代社会学科教授 現代社会学科准教授 現代社会学科助教	西尾 久美子 掛谷 純子 金子 充
作曲家探求シリーズ① モーツァルト	5月・6月・7月	教育学科音楽教育学専攻教授 教育学科音楽教育学専攻准教授 教育学科音楽教育学専攻教授	土居 知子 佐藤 岳晶 田中 純
生命倫理のいまとこれから	6月	現代社会学科教授	霜田 求
京都の歴史 —古代・中世・近現代—	7月	史学科准教授 史学科教授 史学科教授	告井 幸男 早島 大祐 坂口 満宏
親子で作るトートバッグ	8月	生活造形学科准教授 生活造形学科准教授	渡邊 敬子 青木 美保子
情報・知識の科学・技術と現代社会	8月	現代社会学科教授	水野 義之
西洋思想における性と恋愛	9月	現代社会学科教授	江口 聡
いつまでも、いくつになってもよい姿勢	10月	地域連携研究センター 客員研究員	原田 奈名子
インド哲学へのいざない	10月	現代社会学科准教授	藤井 隆道
現代における排外主義の諸相	10月	学長 現代社会学科教授 現代社会学科准教授	林 忠行 松田 哲 城戸 英樹
占領下パリのフランス人音楽家たち	10月	教育学科音楽教育学専攻准教授	田崎 直美
京都画壇の近代化・竹内栖鳳	11月	名誉教授	廣田 孝
不思議の観音物語 —西国三十三所巡礼1300年に因んで—	11月・12月・1月	国文学科教授	中前 正志
デジタル時代の図書館を考える ～京都女子大学の新図書館で～	2月	図書館司書課程講師	桂 まに子

「いつまでも、いくつになってもよい姿勢」 3回シリーズ

京都女子大学地域連携研究センター客員研究員 原田 奈名子

生涯学習

まずは普段どのように座っているか、チェックシートを用いて自覚を促しました。今どこにいるかわからないと、行き先が定まらないのと一緒にですね。

☆普段椅子に座っているとき、当てはまるほうを○で囲んでください。

1. 背もたれによりかかっていますか？（1. はい 2. いいえ）
2. 膝が大きく開いていますか？（1. はい 2. いいえ）
3. 足を組んでいますか？（1. はい 2. いいえ）
4. 腕で体を支えていますか？（1. はい 2. いいえ）

☆一般的に良い姿勢という言い方をします。良い姿勢の反対は悪い姿勢です。では、あなたが良い姿勢をするときどこを意識しますか？

5. 特に意識するところ（1. あご 2. 胸 3. 尻 4. 脚）
6. 良い姿勢をしたとき、痛みや疲れを感じますか？（1. はい 2. いいえ）
7. →はいと答えた方のみ一つ選んでお答えください。

☆どこに痛みや疲れを感じますか？

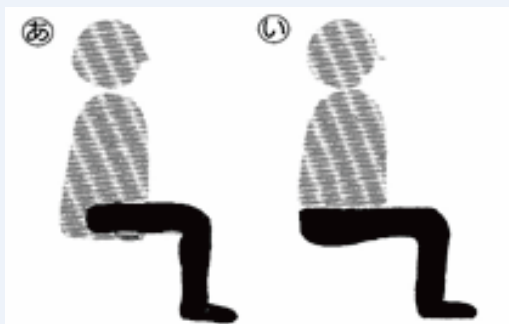
- （1. 首 2. 肩 3. 胸 4. 背筋 5. 脚）

参加された方々が比較的年の大きい方々だったためか、足を組む方はほとんどおられず、腕で体を支える方も極僅かでした。一方、大半が「背もたれによりかかる」でした。背もたれの椅子があれば背もたれによりかかるのは当たり前かもしれませんね。実は、これは椅子の形状の問題でもあります。が、これは紙面が足りませんので、今回は触れません。講習では扱いました。

もう一つ、認識を明らかにするために、下記のチェックも行いました。他にもしましたが、省略します。

◆思っている(考えている)ことについてお聞きします

☆椅子に座っている状態を表す下の絵のうち、あなた自身が座っているイメージに近いのはどちらですか



①:脚が尻の前についている

②:脚が尻の一部になっている

☆あなたと同じつくりの体は骨人形です。木製人形とキューピー人形ではどちらが骨人形と同じ体のつくりでしょうか？



正解は、「あ」、「キューピー人形」です。これは「股関節」の知識・認識について問うています。多くの方が「あ、おしりで座っている」のではなく、「脚で座っている（い、脚と尻が一体）」を選択されました。だからTVや雑誌等で見かける木製人形を選んでしまうのですね。

この認識だとどこが問題か、についてです。坐骨で座る（脚は尻の前で、坐骨より上についている）認識がないと、腰（ウエスト空間）を意識した動きになりやすいのです。だから「腰を落とす・おろす」という言い方が一般的になってしまいました。座るのですから、立っているより腰の位置は低くなりますが、どんな姿勢でも常に脚は坐骨より上についています。

姿勢はこころを語ります。「腰が落ちる」、「腰が引ける」と、頭が下がります（背骨の連動の動き）。その姿勢で前を見上げると、「顎が上がります」。「顎が上がる」は、諦めや持続不可を表す言葉です。古来「腰が引けている」は気持ち前向きでない状態を表し、その姿勢は、諦めや持続不可を導きます。では「腰が決まる」座り方、つまり「好ましい座り方」とはどういう座り方でしょう。また、その好ましい座り姿勢が知的に理解できたら、すぐからだに落とし込めるでしょうか。できませんね。頭で理解したらすぐできるのなら、みな一流アスリートになれる可能性大です。ですが、意識するだけで導くのは簡単ではありません。そこで、初回は物を用いました。



講義風景



上はネットからお借りしました。
下段のようにゆるく巻いたら、ムネが開いた状態になります。

1 回目は「タオルと紐を使って好ましい姿勢を手に入れよう」でした

数年目から「紐とれ」という名称で知られるようになったアイデアです。考案者は小関勲さんです。なぜ、紐を巻くと変化が起きるのかについて、マナ接骨院の院長は、「脳と皮膚の関係から脳膚相関」をうたいます。彼は以下のように説明します。五感の中でも触覚は、明らかに触られたという刺激ならわかりやすいが、触られているという感覚がわからないような極微な刺激でも脳はちゃんとキャッチしている。脳の働きのうち意識できる割合は5%と言われており、無意識下では75%にもなる。その無意識下で何が行われているのかは全てが解明されているわけではないが、ひとトレがそこにアクセスしている事は間違いないと思っている。洋服を着た直後は生地が存在がわかるが、数分も経つとその感覚は忘れてしまう。しかし、脳には常にその情報がアクセスし続けている。紐をゆるく巻いていても、皮膚からの情報は届いている。そのやさしい刺激が筋肉やこころの緊張をほぐしてくれているんでしょう。

紐は写真のように巻くだけではなく、いろいろあります。参加者には胸、腰、尻、足指等を体験して頂きました。すぐに変化が出た方も多く見かけられました。タオルは尾骨の下に敷きます。

2 回目、3 回目は解剖学ベースの呼吸と姿勢に焦点を当てました。

日に何回となく椅子に座ったり、立ったりします。立っている姿勢から座るとき、背中が丸く成りやすく、同じく立とうとした瞬間にもです。「座る」は「低い姿勢になる」と翻訳します。低くなるために胴体の姿勢を変える必要がありません。

低くなるために、ひたすら膝を前に出し続ければ股関節(脚の付け根)も足首の関節も一緒に動きます。

正しいやり方で練習しよう・・・無理な力を使わない動き方の練習ー

ー座るときー

＊順番が大事です。「尻を下げる」ではありません。膝を深く曲げるから尻も下がります。

- ① 椅子の前に立つ、膝を前方に出し続ける(ひざが曲がってくる・ですが、意識は膝を前に出す)
- ② からだがまっすぐのままだと、膝が前に出続けられないから、股関節から前方に倒しながら
- ③ さらに膝を前に出すと、かつてに尻が椅子面にのる(座れる)

注意点は、お尻を後ろに引かない。目線を正面に固定しない。ずっと膝を前に出し続けることです。

ー立ち上がるときー

＊順番が大事です。座面に載っている体重が、足裏に移ることが立つことです。

- ① 椅子に浅く腰掛、足を椅子の近くに着く
- ② 座ったまま、股関節から、足裏が床から離れないところまで体幹部を斜め前に倒す
- ③ 足に体重を乗せて(膝を前に出し、すかさず)、股関節と膝を伸ばす

みなさん、習慣化された動きを改めるのは簡単ではありませんでした。練習用プリントとポスターをお持ち帰り頂き、練習してくださるよう、促しました。すると、次第にできるようになってゆかれました。

呼吸と姿勢は深い関係にあります。座り方について資料や骨格モデルを用いました。

両の坐骨だけだと、後ろに倒れやすい、2点で支えるのは困難です。尾骨が短いから、その短い尾骨と3点で支えると、「腰が落ちる・引ける」。そこで、タオルを丸めて坐骨と同じ高さになるよう尾骨の長さを補います。すると頭が鉛直線上にくるように、3点で支えられます。この姿勢で呼吸すると、これ等を使わないいつものややや背を丸めた姿勢の呼吸と比べました。当然、頭が鉛直線上にある姿勢の方が深い呼吸になります。呼吸は肋骨が動いたり、横隔膜が動いたりするだけでなく、お股の間（骨盤底筋群）や首を含む胴体のたくさんの筋肉が働きます。年が大きくなると呼吸が浅くなりがちです。一つには肋骨も横隔膜も動きが小さくなるからです。浅い呼吸は興奮しやすい呼吸です。怒りっぽくなったり、泣いたり感情と呼吸は強く関係します。呼吸の解剖学はやや難しかったようです。横隔膜がよく動くと、肝臓や胃のマッサージになります。それを理解し、実際に体感するには時間が足りなかったようです。

最後にアンケート結果についてです。

1.満足 2.やや満足 3.どちらともいえない 4.やや不満 5.不満 の5件法で満足度を問いました。

その結果

第1回(10/02)参加者42名 提出40名(回収率95.2%)

1:28名、2:4名、無回答:8名

第2回(10/16)参加者39名 提出36名(回収率92.3%)

1:22名、2:9名、3:1名、無回答:4名

第3回(10/30)参加者35名 提出35名(回収率100%)

1:23名、2:8名、3:2名、無回答:2名

でした。よい評価をいただきましたが、参加者が減少した理由を問わなければなりません。難しかったのかもしれませんが。自由記述は、もっと続けたかった、楽しかった、よくわかった等でしたが、実は続かなかった方が何を求めたていたか、気になるところです。



講義風景

座っているのは坐骨
(骨盤の骨、胴体の骨)

脚の付け根(股関節)は坐骨より高い
ところ、つまり脚は座っていない

リカレント教育課程 ～働くための学びの場～

概要

自らの能力を活用した豊かな人生を支援するため、京都女子大学、京都府、オムロンエキスパートリンク株式会社が連携し「大学連携京都府リカレントプログラム」を開講した。本プログラムは、京都ウィメンズベースにおける基礎講座から始まり、京都女子大学が開講する発展講座へと続く。発展講座で所定の要件を満たした履修者には、京都女子大学より履修証明書が交付される。

平成30年度は、第一期生として、20代から50代の様々なキャリアを持つ女性20名が受講した。

講座開講期間及び会場

- 基礎講座(運営:オムロンエキスパートリンク/会場:京都ウィメンズベース、京都女子大学)
2018年8月20日(月)～9月末
- 発展講座(運営・会場:京都女子大学)
2018年10月1日(月)～2019年1月28日(月)

発展講座開講科目

【キャリア形成科目】

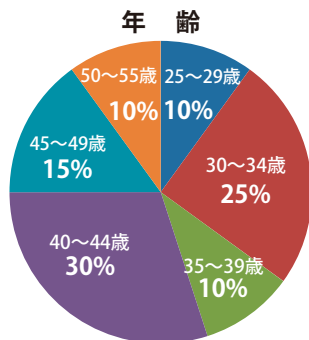
ライフ・キャリアデザイン
ビジネス英語
パソコン基礎
パソコン実践
人事総務
現代ビジネスと起業
企業会計
マーケティング戦略とブランドマネジメント
ロジカル・ライティング
ヴィジュアルマーチャンダイジング(VMD)
初級簿記
秘書業務

【教養科目】

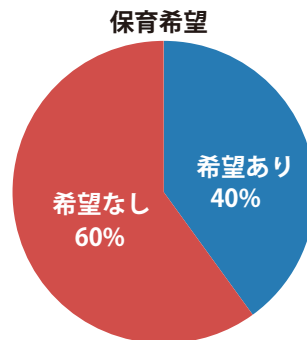
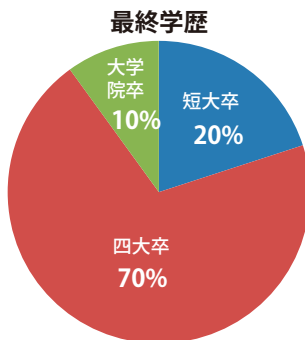
食空間プロデュース論
サービス経営特論
組織マネジメント論
ファッションデザイン学
市民と社会2(女性の多様な生き方を探究する)
服飾美学
金融論
産学連携講座A1(三井住友銀行)
産学連携講座A2(野村證券)
産学連携講座A3(阪急電鉄)



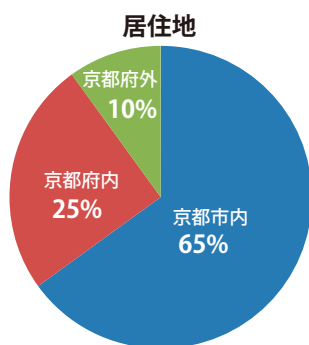
履修者 DATA



20代から50代まで幅広い年代層が受講



保育希望者が40%
子育て世代の学び直しには、
保育環境が整うことが必須。

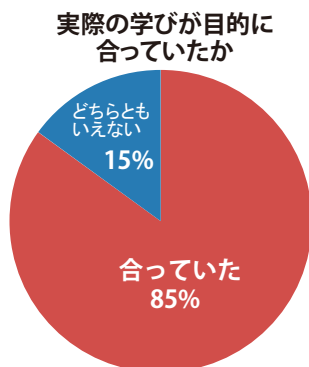


京都市以外の居住地

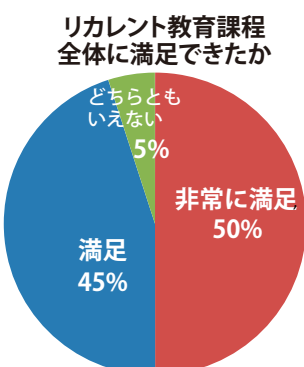
京都府外
・大津市
・茨木市

京都府内
・亀岡市
・長岡京市
・城陽市
・久御山町

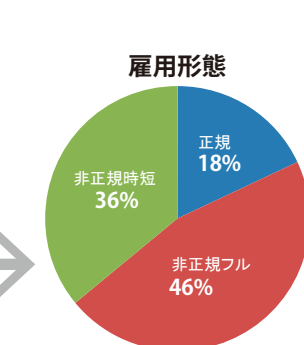
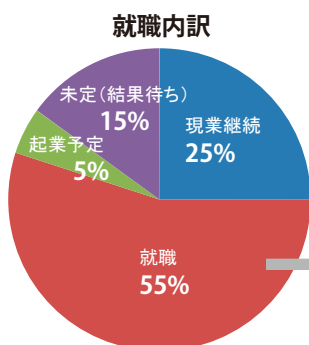
リカレント教育課程への満足度



学びが目的に合っていたと評価する声が85%。満足した割合が95%



就業の状況 (2019年3月末現在)



約8割がリカレント教育課程修了後に就業。
各々のライフスタイルに合わせた働き方を選択。

履修者の声 (抜粋)

- ・自分自身のこれからのライフプランを立ち止まって見直す良い機会となった。リボン(生まれ変わり)ができた半年間だった。
- ・様々なキャリア、様々な年代の仲間に出会えたことが、何よりの財産になった。仲間がいたので、最後まで頑張れたのだと思う。
- ・子どもが小さいうちは、家庭にいるのが当たり前という感覚だったが、講座を受講したり、仲間と話すうちに様々な生き方があることを知り、刺激を受けた。自分も社会に再度目を向け、可能な時間で働きたいと一歩が踏み出せた。
- ・学習面で仲間と教え合ったり、助け合いながら学んでいくという学生時代に戻ったような楽しい最高の時間が持てた。
- ・家事や子育てのみに、時間を費やしていた自分に、不満や不安があったことをより自覚した。子供を預けることに、抵抗やうしろめたさがあったが、保育ルームを利用後は大丈夫だと安心することができた。また同時に、夫にも理解を得ることができた。これからは、社会に出て再チャレンジしたい。
- ・PCなど実践的な面でスキルを磨けたり、今まで知らなかった知識を得ることができ、受講してよかった。もっと、時間数を多く学びたいと思う科目があった。

市民とともに、まちづくり活動

祇園新橋景観づくり協議会との連携

NPO法人京都景観フォーラムとの包括的な連携協定締結を機に、地域連携研究センターでは、祇園新橋景観づくり協議会の定例会「祇園新橋まちづくり部」の会合に2016年度より参加している。

この地区は、祇園新橋伝統的建物保存地区の指定を受けており、洗練された町家や石畳、ほとりを流れる白川、地域の守り神である辰巳大明神など、現在最も京都らしいと称される景観や風情が残されている地域である。近年の観光客急増は、ここで暮らす地域住民にとり、普段の生活面で不安を抱えるような課題となっている。中でも、結婚式前撮り撮影は、風情、景観保全といった問題に留まらず、私有地への立ち入り、造作物の破損、道路の長時間占拠、騒音などの被害をもたらしている。

祇園新橋景観づくり協議会では、2018年度から、撮影マナーのとりきめを示し、とりきめに同意した事業者に腕章を配布して、地域と撮影事業者が共に景観を保持し、撮影マナーの向上に取り組むためのしくみづくりを始動させた。

地域連携研究センターでは、「撮影マナーのとりきめ」を英語、中国語に翻訳する協力や事業者との話し合いの場での意見交換にも加わり、共に活動を行った。

また、地域の清掃や年中行事に女性地域リーダー養成プログラムの連携活動入門を受講する学生や現代社会学部森久ゼミの学生が参加して、景観づくり協議会への協力を行った。伝統的な地域の文化にふれ、地域住民から直接説明を聞く体験は、学生たちにとり、たいへん貴重な機会となった。



弥栄自治連合会との連携

中高齢者の居場所づくり、ふれあい・健康づくり地域連携活動「弥栄健康すこやか学級」の活動支援を2016年度より開始している。本年度は、発達教育学部ガハブカ奈美先生による「健康づくりのための呼吸法」と国際交流センター姜紅祥先生による「やさしい中国語講座」の2講座を実施した。

健康づくりのための呼吸法

講座開始から3年目を迎える「呼吸法」は、「肩こりが解消する。」「体が温まり血行がよくなる。」「どこでも簡単にできるから、続ける気になれる。」と好評を得ている。当初は、少し緊張気味だった高齢者の方も、講座に慣れていただき、とてもリラックスして取り組まれるようになっていく。呼吸法を取り入れた歌を皆で歌うなど、和やかな雰囲気での講座となっている。



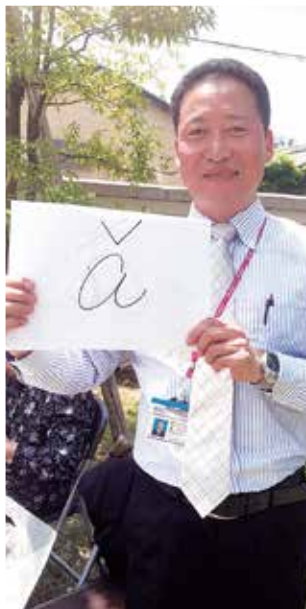
やさしい中国語講座

「やさしい中国語講座」は、中国からの観光客が急増している地域特性を反映して、「道をあけて欲しい時はどう言えばよいの?」といった質問が投げかけられるなど、毎回、熱心に取り組まれている。まずは、挨拶程度の会話から、コミュニケーションが取れるようにと取り組みを始めたが、参加者の方は、いくつかの挨拶をパネルを見なくても言えるようになっていく。また、中国語をお腹から大きな声で発音すること、健康にもよいと、好評を得ている。

10月には、役員の方から本場、中国の餃子の作り方を教えて欲しいとの要望があり、姜先生と奥様の協力を得て、役員の方々と餃子を手作りし、参加者に食べていただく機会が持てた。本場の味は好評で、今後も、教えて貰った手作り餃子を作りたいとの感想が聞かれ、なかなか上手くカタチを作れなかった餃子で話題で、その日はとても盛り上がった。

また今後はお互いの文化を理解していくことが大切だという意見も聞かれた。

やさしい中国語講座



餃子づくりの様子



材料レシピ

祇園北地区4町内、 地藏盆行燈絵の製作

祇園新橋景観づくり協議会との連携活動の一環として、発達教育学部 矢野ゼミの学生と図書館学研究会kwuiclsの学生が、地藏盆に灯す行燈に絵やメッセージを描いた。

7月26日には、弥栄ふれあいサロンにて、行燈絵を木枠に貼り、仕上げる作業を矢野ゼミの学生5名で手伝い、元吉町町内会長秋山氏から、地藏盆とその歴史や地域の取り組みについて説明いただいた。参加した学生からは、「京都の文化に触れる機会が持て、勉強になった。」「祇園新橋に自分たちの作品が飾られるのは感動的。後輩たちも続けて欲しい。」といった感想が寄席られた。

本学の学生が製作した行燈は、8月11日(土)～8月26日(日)の期間、京都市伝統的建物保存地区に指定されている元吉町町内で掲出され、地域の方に喜んでいただいた。



学生参画による連携活動

酒造り体験

今年度も下記の協定先の酒蔵で酒つくり体験を受け入れていただいた。

◇招徳酒造(株)

＜第一期＞平成31年2月7日(木)～9日(土)2名

＜第二期＞平成31年2月14日(木)～16日(土)2名

学生の感想（一部抜粋）

説明会の時点で、「体験した学生はほとんどの方が、『思っていたより大変だった。』と言っています。」と聞いていたのですが、ある程度、覚悟していったのですが、その程度の覚悟ではまだまだ足りませんでした。私が体験した日は、雪が降るほどの寒さの厳しい3日間で、酒蔵に入る前の手洗い場の水が、本当に冷たかったです。また、私は日ごろから運動不足で、体力もないため、疲れて集中力が切れそうになることが多々ありました。しかし、そんな時は、頭の中で「米と水。」と連呼し、集中力が途切れないように努めていました。大変で、疲れて、筋肉痛にもなりましたが、無我夢中で、楽しんで働くことができた最高の3日間でした。(法学部2回生)

招徳酒造の方々に様々なことを教えていただき、3日間とても楽しかったです。体験を通してお酒造りの大変さややりがい、お米一粒を大切に作る酒造の方々の思いを知ることができました。また機会があればぜひ参加したいと思います。掃除や力作業が多かったですが、どれも酒造りには大切なことなので、辛いとは思いませんでした。また、普段はなかなかできることではないので参加して本当によかったです。(生活造形学科2回生)



本年度はリカレント教育課程履修生も1名酒造り体験に参加した

京都市中央卸売市場との連携

京都女子大学は、市場の活性化・地域の活性化及び食育の推進を目指し、京都市中央卸売市場と包括連携協定を結んでいる。今年度も以下のイベントに参加した。

食育イベント参加

(食物栄養学科 中山ゼミ、児童学科 矢野ゼミ)

平成30年11月18日(日)

食育の推進と魚食普及の拡大を目的として、同じく京都市中央卸売市場と協定を締結している平安女学院大学・京都府立大学の学生との合同企画によるイベント「あそぼう!まなぼう!あじわおう!『京の食育ワンダーランド』」に参加した。本学の食物栄養学科の学生は、普段食べているスナック菓子に含まれている油の量を知る「実験!発見!野菜チップス」や楽しく学びながら野菜・果物の知識を身につける「これであなたも野菜・果物博士!」、正しいお箸の持ち方を学ぶ「これであなたもお箸名人」を担当した。本学発達教育学部児童学科の学生は手作りのお箸をつくる「ワクワク木育キャラバン～自分だけのお箸をつくろう～」を担当した。

子どもからお年寄りまで幅広い世代の方が参加され、好評だった。

鍋まつり 参加 (食物栄養学科 中山ゼミ)

平成30年11月23日(金・祝)

京都市中央卸売市場第一市場のイベント「鍋まつり」に参加した。

本学は「鍋ブース」に出展し、食物栄養学科の学生が企画・提案した鍋料理「甘鯛にゆうめん」が販売され、来場者の皆さまに大変好評で、販売後まもなく完売していた。



小学生対象の英語イベント

北九州市の敬愛小学校より依頼があり、小学3年生を対象とした英語イベントを実施した。

小学生は、本学学生とグループになり英語の歌や英単語のビンゴゲーム、英語のクイズなどを楽しんだ。

小学生からは、「大学生のお姉さんが優しく教えてくれて嬉しかった」「わからない単語もゲームで覚えることができた」等の感想が寄せられた。

11月16日(金)

14:15～16:15 英語での交流企画

「Oral Communication II」2クラス授業参加

英語を使ったアクティビティ

参加者数：小学3年生39名、引率教員3名、

本学文学部英文学科学生20名×2クラス

本学准教授 木村マリアン

本学准教授 ジョン・カーベル・ラーセン



平成30年度 新たな連携先との連携活動

大妻女子大学

平成30年7月15日(日)、大妻女子大学より2名の学生が祇園祭のボランティアに本学の学生と一緒に参加した。活動場所の重要文化財指定杉本家住宅では、屏風や「伯牙山」の山鉾が飾られ、学生たちは「祇園会屏風飾り展」の来場者の荷物預かりや、誘導案内を手伝った。

参加した本学学生の感想

ボランティアに参加するのは初めてで、しかも初対面で話したこともない大妻女子大学の学生さんと一緒に動くことになるということで緊張していましたが、向こうから話しかけてくださったので、こちらも話やすく、良い雰囲気の中で終えることができました。少し慌ててしまう場面もありましたが、他の人たちがフォローしてくれたおかげでトラブルもなく終わることができました。とても貴重な体験でした。後輩たちにもそのような機会があれば良いな、と思います。



鹿児島国際大学

7月23日、本学錦華殿において締結式を執り行った。今後、両大学は、包括的な連携のもとに、協力関係を築き、教育力や研究力を基盤として、活力ある地域社会の形成と発展に寄与することをめざす。

本学で、8月7日から実施されたサマープログラムには、鹿児島大学からの留学生が2名参加して、日本語・日本文化研修を受講した。



サマープログラムの様子



東山警察署

呼吸法の講習会

本学発達教育学部 ガハプカ奈美先生による呼吸法の講習会を、1月17日(木)、1月24日(木)の2回、前半60分は警察署員を対象に、後半80分は武道強化選手を中心に実施した。呼吸法を学ぶことで、武道の「間合い」の取り方に変化が生まれ、試合で実力が発揮できると評価を得ている。2回の講習会で、延べ160名あまりの参加をいただいた。

新キャラクター「あずまくん」とランドセルカバーデザイン

本学生生活造形学科 2 回生学生が、新キャラクター「あずまくん」をデザインした。「あずまくん」と命名されたネコは、三方どちらから見ても目線が合うというネコから着想を得ており、周囲に目配せが大切な警察の姿勢を表している。本学生生活デザイン研究所では、2019年度東山区内の小学校新入生に配布されるランドセルカバーのデザインにも「あずまくん」のデザインを採用した。



四条通横断幕

2019年より四条通り・東山通り間で、自転車の乗り入れが禁止されることになった。これにともない東山警察署より依頼を受けて、本学生生活デザイン研究所がガードレールに装着する横断幕のデザインを行った。



連携協定締結先一覧

東山区役所

東山区社会福祉協議会

京都市中央卸売市場第一市場

京都府警察本部

東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会

鳥取県・ふるさと定住機構

阪急電鉄株式会社

招徳酒造株式会社

齊藤酒造株式会社

株式会社三井住友銀行

株式会社朝日新聞社

野村證券株式会社

京都刑務所

京都市立東山総合支援学校

奈良女子大学

株式会社京都銀行

京都励学国際学院

NPO京都景観フォーラム

ムーンバット株式会社

ハイアットリージェンシー京都

大阪ガス株式会社

京都信用金庫

武庫川女子大学

5×Ruby Inc.

奈良先端科学技術大学院大学

京都アメリカ大学コンソーシアム

オムロンパーソネル株式会社

鹿児島国際大学

大妻女子大学

東山警察署

主な活動実績

平成30年

- 4.11 祇園新橋まちづくり部 意見交換会参加
- 4.23 弥栄自治連合会 健康すこやか学級に参加
- 4.29 メイク・ア ウィッシュ オブ ジャパン主催の
World Wish DayチャリティオークKyoto2018
に協力
- 5.8 祇園新橋まちづくり部 意見交換会参加
- 5.13 祇園新橋景観づくり協議会 総会 協力参加
- 5.21 弥栄自治連合会 すこやか学級参加
- 5.28 祇園新橋景観づくり協議会 撮影事業者 会合に
協力参加
- 6.11 リカレント教育課程第1期申し込み開始
(7月13日まで)
- 6.12 祇園新橋まちづくり部 意見交換会参加
- 6.18 弥栄自治連合会 健康すこやか学級参加
- 6.28 リカレントキックオフセミナーのパネルディスカッ
ションに参加
- 7.10 祇園新橋まちづくり部 意見交換会参加
- 7.14 リカレント教育課程第2期申し込み開始(26日まで)
- 7.23 鹿児島国際大学との包括的な連携協定を締結
- 7.26 祇園北側4町内地蔵盆行燈絵の製作作業に発達教
育学部矢野ゼミの学生が参加
(掲出: 8月11日～8月26日)
- 7.31 リカレント教育課程 第1期選考結果発表
- 8.1 リカレント教育課程第2期選考結果発表
- 8.1 東山地域包括支援センターの依頼により校舎前
での生協移動店舗がスタート
(毎週水曜日14時50分～15時20分)
- 8.7 祇園新橋まちづくり部 意見交換会参加
- 8.20 リカレント教育課程入校式・基礎講座スタート
- 8.21 京都市中央卸売市場 すし市場「まちおこし寄席」に
落語研究会が出演
- 9.11 女子大学連携ネットワーク第2回ミーティングに参加
- 9.11 祇園新橋まちづくり部意見交換会参加
- 9.17 弥栄自治連合会すこやか学級参加
- 10.11 本学で東山警察署による「警察官による護身術講
座」を開催

- 10.16 祇園新橋まちづくり部意見交換会参加
- 10.22 弥栄自治連合会すこやか学級参加
- 10.27・28
京都刑務所の「第41回京都矯正展」に児童学科学生
(矢野ゼミ)が参加
- 11.1～1.14
食物栄養学科学生とハイアットリージェンシー京都
が共同製作したスイーツの販売を実施
- 11.2～11.4
大学祭「藤花祭」にて選挙啓発活動(模擬選挙)を東
山区役所と連携で実施
- 11.18 あじわい館イベント「京の食育ワンダーランド」に食
物栄養学科と児童学科の学生が参加
- 11.23 京都市中央卸売市場「鍋まつり」に食物栄養学科の
学生が参加
- 12.17 弥栄自治連合会健康すこやか学級クリスマス会参加

平成31年

- 1.28 弥栄自治連合会健康すこやか学級 お正月会参加
- 2.18 弥栄自治連合会 健康すこやか学級参加
- 2.25 東山区役所との「地域活性化に関する定例連携協議
会」合同開催
- 2.26 京都市中央卸売市場 すし市場「まちおこし寄席」に
落語研究会が出演
- 3.12 祇園新橋まちづくり部参加
- 3.15 京女ラウンドテーブル会議開催
- 3.15 学まち推進型事業 成果報告会開催
- 3.22 弥栄自治連合会 健康すこやか学級参加
- 3.23 祇園新橋景観づくり協議会 コア会議出席

京都女子大学地域・産学官連携ポリシー

(平成29年2月9日制定)

京都女子大学は、創立以来、女性教育のパイオニアとして多様な分野で活躍する女性を輩出してきました。

本学では親鸞聖人の体した仏教に基づく教育を行うことを建学の精神としています。その目的は、人間教育にあります。仏教を通して自己を見つめ自己中心的な姿を明らかにします。互いが自己中心的存在であることを認め信頼関係を構築していきます。現実の諸問題に対しても、問題の本質を捉え、積極的に取り組む人間形成を目指した教育を実践しています。

この建学の精神に則り、京都女子大学は、地域社会、国と地方公共団体、産業界、そして国際社会の発展に寄与する地域・産学官連携を教育と研究に並ぶ大学の使命の一つとして位置付け、この使命を実現するための基本方針として、以下の通り「地域連携ポリシー」および「産学官連携ポリシー」を定めます。

《地域連携ポリシー》

1. 本学の建学の精神に鑑み、地域社会との持続的な連携を行い、地域社会の活性化のために貢献します。(社会貢献)
2. 地域連携活動を通じて、地域に関する教育・研究の進展を図るとともに、地域社会の発展に貢献できる女性人材を育成します。(教育研究促進・人材育成)
3. 地域連携により得られた知の成果を広く社会に還元し、地域社会と地域課題の共有に努めます。(地域課題の共有)
4. 地域連携活動を積極的に推進するための活力ある組織運営を行います。(体制整備)
5. 地域連携活動を大学の自己評価に反映させます。(自己評価)
6. 本学の地域連携活動を大学の内外に向けてわかりやすく発信します。(情報公開・広報活動)

《産学官連携ポリシー》

1. 公的機関・企業等との共同研究・受託研究等を積極的に推進し、社会・経済の発展に寄与するとともに、本学の教育研究活動の基盤向上を図ります。(共同研究)
2. 産学官連携活動から得られる成果を本学の教育・研究の促進に役立てます。(教育研究促進)
3. 産学官連携活動を通じて、社会の発展に貢献できる女性人材を育成します。(人材育成)
4. 本学と公的機関・企業等との組織間の明確な契約による連携を基本とし、産学官連携により得られた知的財産を適切に保護・管理し、有効活用していきます。(知財管理・活用)
5. 透明性の高い産学官連携活動を行い、説明責任を果たします。(説明責任)
6. 産学官連携活動を積極的に推進するための活力ある組織運営を行います。(体制整備)
7. 産学官連携活動を大学の自己評価に反映させます。(自己評価)
8. 本学の産学官連携活動を大学の内外に向けてわかりやすく発信します。(情報公開・広報活動)

以 上



編集・発行

京都女子大学 地域連携研究センター

〒605-8501 京都市東山区今熊野北日吉町35

TEL. 075(531)9057 FAX. 075(531)7323

E-mail: r-suishin@kyoto-wu.ac.jp

URL: <http://rccp.kyoto-wu.ac.jp>